

學 報

Kobe College Bulletin

ISSN0389-164X

NO. 169

2013.12.10

神戸女学院

学報委員会

W. M. ヴォーリズのメッセージと神戸女学院

学 長 飯 謙

本年度は岡田山移転80周年にあたります。本誌3ページ目に報告されておりますように、学院では創立記念日の10月12日(土)に記念礼拝とシンポジウムを開催し、改めてキャンパスの設計者であるウィリアム・メレル・ヴォーリズ博士の思いを学びました。本稿では、そこから受けた示唆を元に、神戸女学院の教育が目指す地平を考えたいと思います。

まずヴォーリズの自叙伝により、その歩みをたどります。ヴォーリズは1880年10月、米国中西部のカンザス州レブンワースに誕生しました。父方はオランダ改革派、母方は英国長老派と、教会に忠実に仕える家庭でした。父ジョンの転職に伴い、一家は1888年にアリゾナ州フラッグスタッフ、さらに1896年にはコロラド州デンバーに移り住みます。その地でヴォーリズは高校を卒業しました。名門マサチューセッツ工科大学への進学が決まっていたとのことでしたが、経済状況を鑑み、地元のコロラド大学に進学します。

コロラド大学は会衆派教会の牧師らによって設立されたリベラルアーツ・カレッジです。ヴォーリズは入学時には建築学を志していた、理系に進む予定であったそうです。しかし学内でのキリスト教活動から感化を受けて文系に転じ、1904年に哲学科を卒業して、コロラドスプリングスのYMCAに奉職しました。このYMCAが彼のコロラド大学における活動を導いた団体で、海外宣教に熱心に取り組んでいました。当時わが国では、明治政府が「放課後のバイブルクラスは可」との条件で、YMCAを通して米国人英語教師を募っていました。ヴォーリズはこれに応じて1905年来日し、近江八幡の滋賀県立商



業学校英語教師となります。その後「近江基督教伝道団」を結成し、英語と聖書の教育、YMCA運動、そして建築事務所の開設など、多彩な活動に身を捧げました。ここまでのヴォーリズの歩みを振り返りますと、鍵となる概念として、①多地域での生活、②多領域の学修と活動、③キリスト教の感化、などが浮かび上がってまいります。

今回、移転80周年を記念するシンポジウムで講師の先生方が触れられたヴォーリズ建築のもつ特徴は、いま述べた鍵概念といくつか重なりをもちます。先生方が第一に強調されたのは、ヴォーリズの「現地主義」とでも評してよい、与えられた素材を活かして用いる精神で、上記の①と関わります。即座に思いつくのは、岡田山の形状をそのまま建物の配置に置き換えた着想です。谷間に音楽館、山上に校舎群、その背後の保護されたスペースに寄宿舎他の居住区。また海と山が向かい合うロケーションか

ら、いわゆる「地中海様式」を選びました。

建築学的には、欧米の最先端の技術と共に、日本の伝統文化や技法・技巧を重視したということです。お隣の韓国でも梨花女子大学本館などの仕事をしています。同様のスタンスであった、と。神戸女学院についていえば、壁のレリーフに左官の技能が用いられ、表情のある質感の創出に貢献しています。そうでなければ、当時の流行を考えると、随所に大理石を始めとする石材を用い、豪奢で威圧的な方向に走る結果を生んだであろうと申します。確かに岡田山キャンパスが建てられた20世紀の前半は大量生産による工業社会幕開けの時代でした。ヒューマン・スケールにとどめるには、ある種の勇氣も必要であったと思われますが、ヴォーリズが出会った日本文化がその後押しをしたということでしょうか。他にも、講堂の乳白色系のステンドグラスがあげられました。ステンドグラスと聞くと、欧米の教会に見られる壮麗な着色ガラスのデザインを思い浮かべますが、中世のフランスに大きな影響を与えた、厳格を旨とするシトー派の修道院では、あえて地味な色調のステンドグラスを導入したそうです。ヴォーリズにもこの傾向が見られますが、華美を避ける、日本の伝統や神戸女学院の慎ましい学風をよく理解したゆえであったと思われます。

第二の特徴は、明暗の対照性を積極的に活かしたことです。現代建築が窓や天井に工夫を凝らして、採光に重きを置いたことはよく知られています。闇を放逐しようとしたかに感じられます。対して、神戸女学院の建物は、教室やチャペル、図書館を始め、廊下も階段も——先ほど述べたステンドグラスへのこだわりと重なりますが——抑制された明るさで、むしろ闇陰を感じます。あたかも周囲に目を囚われることなく、自分を見つめるよう促しています。しかし窓辺に至ると、あるいは、暗い廊下を突き進み、扉を開けて中庭に出ると、まばゆく輝く光の世界に出会います。かつて名誉教授の内田 樹先生はこの様を「産道」に喩えられましたが、ここからは新たな生命が生み出される予兆を感じます。闇と光。鍵概念の②に触れた、多領域での活動から彼自身が学んだことであったと考えます。

この関連もあるのでしょう、それぞれの建物を回廊でつないだ点が第三の特徴としてあげられます。

実用性や効率性を考えるならば、廊下の部分にも建物を配した方が床面積を稼ぐことができたかもしれません。しかしヴォーリズは、そのような数値化される価値を採用しませんでした。それに代わり、個別のもの（建物）をつなぐ作業を示したのです。なるほど、神戸女学院の中庭に立ちますと、向かい合う建物は、相互に似ていますが、それぞれの外的な形状は異なりますし、内部に目を向けましても、階段の位置や部屋の規模、また配置も独自のものです。機能分化といった実利的な動機のゆえとの説明も可能でしょうが、そうではなく、異質なものを画一化させず、さりとして乖離したまま放置しないという聖書の思想に遡るメッセージが読み取れます。神が各人を個別に創り、関わらせ、活かして用いる——ヴォーリズにとって回廊は、単なる通路ではありませんでした。与えられたものを、そのままに活かし、つなぎ、新たな意味をもたらすという、ヴォーリズ自身が受け止めたキリスト教信仰の現出でした。

文化人類学者の川田順造が「文化の理解」について、その内容は、何か固定的に定まったものとして初めから存在するのではなく、「理解しようとする主体の働きかけに応じて姿を表す」と述べています。この言葉は、文化理解には主体の自画像という性格がつきまとうとも取れますが、本来意図するところは、理解する側がもつべき、対象への共感、あるいは敬意です。聖書にも、神について同様な所感を記した箇所（詩編18編など）がありますが、神戸女学院にも平行移動が可能な考えだと思えます。わたしどもの学舎は日本一美しいと言われますが、最初から美しい完成品として造られたわけではありません。ヴォーリス博士は、設計にあたり、あまり細かい指定をせず、使用者がこの学舎の創造に参加して、完成へと至らせるよう、随所に仕掛けを施したと申します。わたしどもの先輩方が学舎を愛して、その価値を見出し、神と隣人の喜びが何であるか考え、その麗しさを引き出すよう愛情を注いだゆえに、学舎が自らその価値ある姿を現し、今日、高く評価されるものとなった、と。わたしどももこの教育的配慮に満ちた学舎の意味を新たに引き出し、未来に引き継ぎ、「愛神愛隣」の想いを深める努力を重ねたく思います。

神戸女学院岡田山キャンパス移転 80周年記念シンポジウム報告

2013年10月12日(土)、138回目の創立記念日に記念シンポジウムは開催された。当日は天候に恵まれ、約1,000名の人々が岡田山に集った。

シンポジウム開催に先立って、13時から記念礼拝が持たれ、ヴォーリズ作詞作曲の献堂讃美歌が歌われた。

13時30分、隈 研吾先生(東京大学教授)の基調講演を皮切りに、3人のゲストの話でシンポジウムは始まった。

隈先生は建築史、文化史の立場から話して下さった。ヴォーリズの何が面白いのか。2つ挙げることができる。まず一つ目は1933年という時期である。クラシックな様式から近代的な様式へと移り変わった時期の最後の年。質感や光の効果、これまでの豊かな表現とコンクリートなどの新しい技術を融合することができた。しかしヴォーリズは「豪華であるものを慎重に避けた」。豪華という石を思い浮かべるが、石の使用量は少ない。職人技で石に見せている。材料の使い方が特別で人にやさしく品がいい。あらゆる部分にヴォーリズの精神がみられる。色々な様式が混じっているのにそれを感じさせない。上質な部分をとって構成している。二つ目は、日本とアメリカの間にあって、そのいいところをとったということである。左官の仕事、木の仕事を多用している。それは日本を愛していた、というだけでなく、専門教育を受けていなかったゆえにドグマティックにならずに現場主義でいけたということである。今、人間の原理、ディテールで考え直さなければならない時代になっている。神戸女学院はディテールも自然環境もそろっており、地形を巧みに使っている。与えられたものを活かして用いている。

続いてヴォーリズ建築の専門家として山形政昭先生(大阪芸術大学教授)が話をされた。ヴォーリズにとって岡田山のロケーションを得たことが大きい。Spirit(キリスト教)、Site(岡田山)、Planning(設計)がHarmonyを奏でている。特徴をあげると、中心に至るアングルがななめであること、住宅的なまとまり感があること、各所にシーンがあること。建物の個性がありながら一体である、Grown into One—これが神戸女学院岡田山キャンパスである。

次に卒業生の立場から江戸 雪氏(歌人)が話をし

てくださった。学生時代、校舎がヴォーリズ建築であるとは知らなかった。坂を上って登校すること、六甲山が見えること、思い出のシーンのバックに校舎があること、におい、感触、音、すべてが原風景である。特に光と陰に強烈な印象がある。講堂の暗がりから明るい中庭への渡り廊下、そのエアポケットのような空間の暗がり、陰。あいまいな空間、あいまいな時間の大切さを知った。

この後、司会の飯 謙学長を交えて4人でパネルディスカッションが行なわれた。まず廊下の持つ意味合いが話し合われた。廊下で区切るというデザインは神戸女学院にしか見られないもので、通路ではない廊下という少しあいまいな空間の大切さが再認識された。そして廊下が木造であることから、ここでは風を感じ、動きがある。これは日本の「階」に近く、「垣間見感」がある点で日本的情感を感じさせる。分断しないでつないで垣間見られる、これはまさにリベラルアーツにつながる。次に「時間を作ってもらった感」に話が及んだ。建物を作ることは人間も含めた他のさまざまなものを育てることに他ならない。こうした記憶の積み重ねが校舎には残っている。隈先生から「できた時から時間を経たように作りたかったのではないか」という指摘があり、一からではなく、旧来のものを受け継ぐことによって、既視感のある記憶をつなぐような場面が作りこまれる手法がとられたためではないかと山形先生が応じた。この後質疑応答が行なわれ、シンポジウムは終了した。

(神戸女学院史料室)



神戸女学院第5代院長 デフォレスト先生召天40周年記念行事報告

今年は神戸女学院にとって、岡田山キャンパス移転80周年にあたると同時に、この大事業の舵取りをなさった、第5代院長シャーロット・バージス・デフォレスト先生が、お亡くなりになって40周年にもあたります。

先生は、1879年2月23日、アメリカンボードが日本へ派遣したジョン・ハイド・デフォレスト宣教師の次女として大阪でお生まれになり、1973年7月2日、引退先の米国カリフォルニア州クレアモントで亡くなりました。遺言により、先生のご遺灰は日本に送られ、ご両親が眠っておられる仙台市青葉区北山にある輪王寺境内の墓地に埋葬されました。

学院では、2003年の召天30周年に際して、関係各位と取り交わした覚書（5年毎の仙台での記念行事は30周年を最後とする）は尊重しつつも、先生の学院での大きなお働きや、デフォレスト家の墓地の管理をお願いしている日本基督教団仙台北教会（先生のご父君がその前身である日本組合教会宮城教会の設立に関わり、初代仮牧師をおつとめになりました）との深い縁を次世代に語り継ぐことを考え、学生たちと共に仙台を訪問し、記念行事を守ることを決定いたしました。6月29日（土）正午より輪王寺で墓前礼拝をまより、引き続いて市内青葉区上杉の勝山館において愛餐会を行うこととして、宮城県在住およびめぐみ会仙台支部ゆかりの同窓生の方々にご案内を差し上げました。

中野敬一大学チャプレンの司式でまもられた墓前礼拝には、学院・めぐみ会・仙台北教会の関係者約30人が集いました。飯 謙学長・学院チャプレンは奨励の中で、デフォレスト先生がキャンパス造営の折に作られた詩“Beauty Becomes a College”（2000年の創立125周年を祝って、澤内 崇音楽学部教授によって曲がつけられ、現在は学院の記念歌となっています）を通して先生が伝えようとなさったのは、“warm with the love of serving”、仕える愛とともにある温かさ、奉仕への思いが美なのだということであり、私たちが愛をもって互いに仕えあう歩みをなしていくことを心に刻みたいと語られました。

愛餐会では、お招きした仙台北教会の方々から、貴重なお話の数々を伺いました。元学院理事の方から、長崎への旅の途中で岡田山に先生をお訪ねになった日のこと、菅隆志第8代牧師夫人から、先生のご遺灰が届いた時の様子、川端忠治郎第6代牧師令嬢から、ご父君が先生の墓碑銘を何度も練習を重ねてお書きになった時のエピソードなど。同窓生のみなさまからもそれぞれに思い出が語られ、それを受けて現役の学生たちから「受け継ぐ」ことへの頼もしい発言があり、まだまだ話し足りない、聞きたい思いの中で再会を約してお開きとなりました。

翌30日（日）、学院からの一行と同窓生数名は、仙台北教会の主日礼拝に出席し、森孝一院長が「二つの祖国」という題で、主に院長としてのデフォレス

ト先生の事績をたどる説教を行いました。（『学院史料』次号に掲載される予定です。）

続いての教会員のみなさまとのまじわりの会では、小西望牧師からスライドによる教会とデフォレスト先生の紹介があり、互いにエールを交換するなど、和気藹々の楽しい時間をいただきました。

7月5日（金）には、学院で記念礼拝がまもられ、今度は仙台から小西先生が岡田山をお訪ねくださいました。前述のスライドがきっかけとなり、めぐみ会が大切に保管しているデフォレスト先生のお人形も壇上で一緒に礼拝に参加しました。小西先生は「太白山と太平洋」と題する説教の中で、デフォレスト先生のご指示で、輪王寺のデフォレスト家の墓石が、一方は仙台の人々が愛する太白山を、一方は故国アメリカにつながる太平洋を望むように建てられていることを紹介し、生まれ育った日本においても、また母国アメリカにおいても神を愛し人を愛する生涯を送られたことを、先生が晩年に作られた“Timeless”という詩を引いて証してくださいました。

仙台と岡田山の間に、40周年記念行事を通じてまた新しい出会いと絆が結ばれましたことを、長年にわたって先生の墓地のお世話を続けてくださっているめぐみ会仙台支部のみなさま、仙台北教会のみなさまへの感謝とともに、ここにご報告いたします。

（院長室課長）



墓前での集合写真



デフォレスト先生遺愛のお人形（めぐみ会所蔵）

神戸女学院家庭会報告

個人情報保護のため、一部削除しています。

個人情報保護のため、
一部削除しています。

初夏の公開講座報告

2013年度の春季公開講座は「初夏の公開講座」と題しまして、6月8日、22日、29日に、本学教員を含む3名の講師により、「ことばとリズム」というテーマで開催いたしました。

第1回（6月8日）は、同志社女子大学名誉教授の安森敏孝先生をお招きして、「ケータイ短歌と介護百人一首 ―「和歌」から「短歌」へ―」と題してご講演いただきました。和歌から明治以降の短歌までの解説と鑑賞を通して、「訴える」ものとしての歌の系譜についてお話しくださり、また、その系譜に連なるものとして、先生が提唱されている、「ケータイ短歌」、「介護百人一首」についてもお話しくださいました。

第2回（6月22日）は、本学総合文化学科准教授の建石 始先生に、「日本語とリズム」と題してご講演いただきました。実際に声を出したりしながら、日本語の音声やリズムについて、普段は意識することのない、さまざまな問題に気付かせてくださる、興味深いご講演でした。

第3回（6月29日）も本学教員、英文学科教授の和氣節子先生に、「英詩のリズム」と題してご講演いただきました。シェイクスピアに代表される英詩のリズムの特徴やその働きを、朗読も交えてお話しくださり、私たちがそのことばのリズムを快く感じるのは、私たちには善美なるものを捉える「共通感覚」がそなわっているからではないかというお話でした。

今回の「ことばとリズム」というテーマは、ややかたい印象があったのか、一昨年の春季（テーマ「食の喜び」）、昨年の春季（テーマ「笑い」）に比べ、受講者数はやや少なめでしたが、昨年の秋季（テーマ「メディアとコミュニケーション」）よりはやや多く、まずまずの入りではなかったかと思います（第1回107名、第2回100名、第3回76名）。今後も、地域の皆様にも親しみやすく、有意義なテーマを模索して参りたいと思います。

末筆ながら、ご来場くださった皆様、ご講演くださった先生方、スタッフの皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

（生涯教育委員長）

学院リトリート報告

今年も学院リトリートを7月26日(金)に行ないました。参加対象者は教職員です。学院リトリートとは、学院全体でキリスト教主義と建学の精神について学ぶことを目的としています。なかなか落ち着いて考える事が難しい中、日常の業務から少し離れ、キリスト教を軸に、いろいろな視点から私たちの働き場について考えることができればと願って設けられたプログラムです。

今年も昨年に引き続き、『神戸女学院宣教師一建物の名称を追って』と題し、学内の3名の講師にお話しいただきました。宣教師として来られ、本学にとって欠かせない存在となられた先生方について、改めてその功績と志しについて考えるひと時となりました。お忙しい中、発題をお引き受け下さいました中高部チャプレン、中村 健先生、佐伯 裕加恵様、心より感謝申し上げます。

3名の講師の方々からは、皆さん楽しく分かり易いお話をいただき、出席者の方々に大変好評でした。その後のプログラムでは、お話を受けて近くに座った教職員が、懇親を兼ねて学院について語り合い合う良い機会となりました。

日 時 2013年7月26日(金) 14:00~16:00

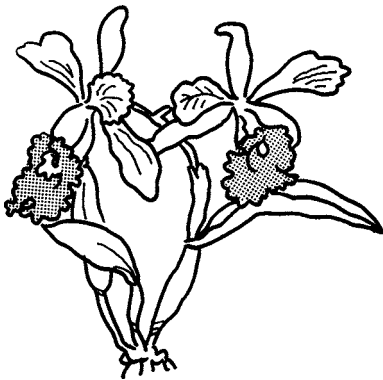
場 所 メアリー・アンナ・ホルブルック記念館 301号室

参加者 122名 司 会 飯 謙

発 題 『神戸女学院の宣教師一建物の名称を追って』

- ・ Julia Elizabeth Dudley 先生 中高部チャプレン
- ・ George Allchin 先生 音楽学部教授 中村 健
- ・ Charlotte Burgis DeForest 先生

史料室 佐伯裕加恵
(チャプレン室)



2013年度 宗教強調週間

プログラム

〈11月11日～11月15日〉

11月11日(月)

早天祈祷会 音楽学部 音楽学科 3年生
中高部礼拝 学長・学院チャプレン 飯 謙
チャペルアワー 飯 謙

11月12日(火)

早天祈祷会 高等学部 3年生
中高部礼拝
「わたしを生かすもの：
いのちの形とキリストの許しについて」
国立療養所邑久光明園園長 畑野研太郎
チャペルアワー
「自己実現は可能か：
イエスさまのおられるところ」 畑野研太郎
全教職員礼拝
「出会いの物語を紡ごう：
わたしたちに与えられた召命」 畑野研太郎

11月13日(水)

早天祈祷会
人間科学部 心理・行動科学科 2年生
中高部礼拝
ミンダナオ子ども図書館創設者 松居 友
チャペルアワー 松居 友
中高部 PTA のための宗教講話 松居 友
学生寮 夕拝「共に生きる」
日本基督教団能登川教会牧師 谷 香澄

11月14日(木)

早天祈祷会 高等学部 2年生
中高部礼拝「キリストの心をもって心とせよ」
新島学園短期大学宗教主任・准教授 山下 智子
チャペルアワー
「神のよき友となれ」 山下 智子
同窓生のための宗教講話
「心和すれば天真を得」 山下 智子

11月15日(金)

早天祈祷会 文学部 総合文化学科 4年生

中高部礼拝 音楽礼拝

S 3 音楽選択者、オルガン：前田 直子

S コーラス部「詩編137編」

(コチャール作曲)

アッセンブリーアワー「宗教音楽の会」

大学院音楽研究科1年生

＜大学チャペルアワー＞

今年度は宗教強調週間講師として、日本キリスト教海外医療協力会 (JOCS) から主にバングラデシュで医療協力をされ、ハンセン病の医師として「クリスチャン・レプロシー・センター」勤務を経て国立療養所邑久光明園にて外科医長、副園長を歴任された後、JICA (政府からの援助プロジェクト) よりミャンマー政府ハンセン病・基礎保健医療向上プロジェクトの長期専門家として派遣され、現在は国立療養所邑久光明園園長をされている畑野研太郎氏。福武書店、児童書部の初代編集長を経て、キダバワンに「ミンダナオ子ども図書館」を設立され、モスリムの戦闘難民と山岳民族の子どもたちの心のケアと医療プロジェクトを行い、マノボ族の酋長に任命され、現在ミンダナオで「ミンダナオ子ども図書館」を主催しておられる松居 友氏。日本基督教団弓町本郷教会伝道師、日本基督教団会津若松教会を経て、新島学園短期大学宗教主任・准教授で、NHK Eテレでは「グレーテルのかまど」「八重の洋菓子」に出演され、NHK 大河ドラマ『八重の桜』キリスト教関連指導担当された山下智子氏。以上の3名の先生を講師としてお迎えしました。

12日(火)は畑野研太郎先生が「自己実現は可能か：イエスさまのおられるところ」と題してお話してくださいました。畑野先生は、生きるリアリティを喪失しているといわれる現代において、本当に充実した自己実現を達成するにはどうすればよいのかというお話で、1991年のバングラデシュの台風時の経験談も交え、自分の為に自分の自己実現のみを求めて生きている間は、命の核であり神のかたちである愛を実現できず結局自己実現はできない。そして、今私たちができることは、出会いを大切にし、何よりも自分とその人たちの為に祈ることが大切であるとお言葉をいただきました。

13日(水)は松居 友先生がご担当くださいました。

松居先生は、ご一緒に来られたご子息の松居 陽氏が音楽付きで編集くださったミンダナオ島の様々な写真を映写してくださりながら、ミンダナオの戦乱の傷跡、子ども達の生活とその取り巻く社会環境を説明して下さいました。その中で、異民族の対立を防ぐのは、お互い敬意をもって違いを認め合うことが大切であり、そのような心をもって、世界中で友達を作り、友達同士助け合えるようになって欲しいというお話をしてくださいました。

14日(木)は山下智子氏にお話しいただきました。先生は新島八重の生涯とそれを支えたキリスト教の信仰についてお話ししてくださいました。八重は新島襄からキリスト教の考え方について強い影響を受け隣人愛の精神に花開かせ、八重の最晩年には「神のよき友となれ」という言葉を残されました。私たちも神のよき友として八重の生涯に学び元気をいただきながらそれぞれの人生を私らしく歩めたら幸いですと締め括られました。

12日の全教職員礼拝では、畑野研太郎先生に励ましのメッセージをいただきました。また続けて永年在職者表彰式が行われ、長年ご奉仕くださった教職員の方々へ感謝のひと時を持つことができました。

期間中、毎朝8時から早天祈祷会がまわれ、若き姉妹の証を聞くことができました。共に祈るひと時を神戸女学院に連なる者で守ることができ、とても嬉しく思います。

遠方からお越しくださり、一日に何度も講演してくださいました講師の先生方に深く感謝申し上げます。

(チャプレン室)

<中高部礼拝>

1日目は学院チャプレンである飯先生に「今日のわたし」という題で奨励をいただきました。「神の恵みによって今日のわたしがいるのです。」というパウロの言葉について、神の恵みとは隣人の痛みを共に負いつつ互いに愛を捧げ合うことなのだと気づかされました。2日目は畑野健太郎氏のお話に耳を傾けました。畑野氏は、人間の愛のかたちは神様に似せて作られており、そのかたちに沿った行動ができたときには心が喜びで満たされるようになっていると話されました。しかしながら人間は皆弱い存在で、完全な愛を実行することはとてもできません。

そんな私たちのことをも神様はゆるし、愛してくださいさるのだというあたたかいメッセージをいただきました。3日目は松居 友氏と、その息子さんの陽氏が来てくださいました。彼らはミンダナオ島に“子ども図書館”を創設し、120人ほどの子どもたちと共に暮らしておられます。陽氏が作ってくださったビデオを見せていただきながらお話を聞きました。「まず大事なものは何かしてあげようとか、可哀想だとか、そういうことではなくて、大事なものはまず現地に行ってみて友達になること。友達が困っていたら助けたいと思うでしょう。」という言葉に、支援に関して価値観を大きく変えられた生徒も多くいたことと思います。4日目の山下智子氏は「キリストの心をもって心とせよ」と題してお話をしてくださいました。これは新島八重が頭に置いていた聖句であり、山下氏によるとこれは「自分のことばかりでなく、他人のことも考える」という意味だそうです。人は誰も劣等感や焦燥感に苛まれて自分のことを考えるので精いっぱいになってしまうことがあります、(八重にとって夫の襄がそうであったように)固まった心を時間をかけて溶かしてくれる隣人の存在があることを忘れないようにしたいものです。5日目は皆で音楽礼拝をもち、今年は詩編137編をテーマにした曲が演奏されました。Sコーラス部やS2音楽選択者による合唱やS3音楽選択者によるハンドベルの演奏に耳を傾け、素晴らしい一時となりました。放課後プログラムも開催され、色々な方のお話を聞けたので皆にとっても学ぶことの多い一週間を過ごすことができました。

(S宗教部 高等学部 2年生)

KCCだより

コーベ・カレッジ・コーポレーション（KCC）は、1920年の創立以来、絶えず海の向こうから神戸女学院の学びを支えてくださっている、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体（NPO）です。2004年、KCC は21世紀におけるその活動方針を明確にするため、名前の後にジャパン・エデュケーション・エクステンジという副称を付け加えて、通称 KCC-JEE となりました。岡田山のキャンパス造営に対する多大な貢献をはじめとして、90余年間、その活動が神戸女学院にもたらしている恩恵は、実に多岐に亘っています。高等学部夏の訪米語学研修旅行の際にお世話になった理事の石田卓三氏から、今回 KCC だよりを送っていただきました。

「神戸女学院高等学部 訪米語学研修旅行」

KCC-JEE 理事

石田 卓三



今年2013年の夏、神戸女学院高等学部の生徒24名と監督の先生2名が、米国ミネソタ州のウエスト・セント・ポール市にあるセント・クロイ・ルーセラン・ハイ・スクールが主催するサマー・イングリッシュ・キャンプに参加しました。このプログラムについての紹介と報告をしたいと思います。

2年前の2011年の夏に、神戸女学院高等学部の教頭先生と英語科主任の先生のお二人がミネソタに

来られ、このプログラムの調査のためにセント・クロイ・ルーセラン・ハイ・スクールを訪問されました。その後、いろいろな角度から検討された結果、神戸女学院高等学部のプログラムとして採用しよう、と決まり、この夏に実施されたという次第です。セント・クロイ・ルーセラン・スクールは、幼稚園から5年生までの小学校、6年生から8年生までのミドル・スクール、9年生から12年生までのハイ・スクールからなるキリスト教主義学校です。国際教育

に力をいれていて、18ヶ国から約100名の生徒（International students）を受け入れているそうです。この夏に初めて神戸女学院高等学部が参加したサマー・イングリッシュ・キャンプは、ハイ・スクールのプログラムの一つで、年齢が12歳から17歳の生徒が対象になっています。

訪米語学研修旅行の日程と概要を簡単に以下に述べます。

旅行期間：

2013年7月12日（金）～2013年8月4日（日）

ミネソタ到着前にワシントン州シアトル市を訪問
サマー・イングリッシュ・キャンプ期間：

7月15日（月）～8月2日（金）

神戸女学院高等学部からの参加生徒数：

24名（高校2年生2名、高校1年生22名）

監督指導教諭：2名

日本以外の参加生徒の国：

中国、ベトナム、韓国、ブラジル、コロンビア、チェコ、ドイツなど

アメリカ人家庭でのホーム・ステイ体験：

7月19日（金）～7月21日（日） 2泊3日

生徒の一日の活動内容

時間	授業と活動
午前 7:15- 7:45	朝食
8:15- 9:05	英語リーディング
9:15-10:05	英語文法
10:15-11:05	英語会話
11:15-12:05	教科授業 (週代わりで、理科、数学、社会)
午後12:20-12:50	昼食
1:30- 4:00	スクールバスで市内見学*
5:00- 5:30	夕食
6:00- 7:00	自由時間
7:00- 8:00	学習
10:00	消燈

*市内見学場所：フォート・スネリング、モール・オブ・アメリカ、ハリエット・アイランド、セント・ポール聖堂、ミネソタ州議事堂、ミネソタ大学、スカルプチャー・ガーデン、コモ動物園、ヴァレー・フェア、水族館、サイエンス・ミュージアム、他。

第三週木曜日の夕方にはタレント・ショウが開催され、神戸女学院高等学部の生徒も多数出演し、歌

やダンスを披露しました。以上の内容からお分りの通り、生徒のスケジュールは一日一杯に詰まっており、参加する生徒は勿論、監督の先生方も多忙でしたが、有意義なプログラムだったと確信します。

サマー・イングリッシュ・キャンプのプログラムとは別に、神戸女学院生のための独自のプログラムとして、上で述べましたように7月19日(金)から21日(日)の週末を24名の生徒が12のアメリカ人家族のもとでホームステイを経験しました。一家族につき2名の生徒を受け入れていただきました。このホストファミリーを確保することがKCC-JEEの役目でしたが、ミネソタ在住のKCC-JEEのかつての理事の方々の協力もあって、無事に役目を務めることができました。ホストファミリーを快くご承諾いただいたご家族に、改めて厚く御礼申し上げたいと思います。

引率の先生からホームステイを経験した生徒の感想文を読ませていただく機会がありましたが、どの生徒も、すばらしいホストファミリーの歓迎と親切に接し、感動した心境が良く表現されていました。これは、受け入れていただいたホストファミリーがすばらしい人たちであったからだけではなく、そのご家族にお世話になった生徒の皆さんの人間性も立派であったからだと思います。今後、このプログラムが検討され、将来、ミネソタでまた実施されるようなことがあれば、喜んで協力させていただきたい、と思っております。生徒、先生の皆さん、どうか、この経験を将来に活かして頑張ってください。至らない処が多々あったと思いますが、神戸女学院にまたお手伝いできれば願っております。



史料室の窓(32)

キャンパス探訪(3)

岡田山に加わった日常

神戸女学院史料室

2013年10月12日、神戸女学院は138回目の創立記念日を迎えました。この日、講堂で、岡田山キャンパス移転80周年を記念して、記念礼拝とシンポジウムが行なわれました。

礼拝の中で、中高部と大学のコーラス部の奉仕によって、一つの讃美歌が歌われました。Dedication Hymn(献堂讃美歌)―岡田山キャンパスの設計者であるウィリアム・メレル・ヴォーリズ(Mr. William Merrell Vories)が神戸女学院の新キャンパス献堂式のために作詞作曲した讃美歌です。1934年4月18日、音楽部合唱隊によって披露されたこの曲は、約80年の時を経て、再び講堂内に響き渡りました。けれども、今回の響きは前回と同じではありませんでした。もちろん、歌っている人が違っていた、ということもありますが、それよりもっと大きく違っていることがありました。それは伴奏でした。キャンパス完成時、毎日、礼拝で欠かさず素敵な音色を響かせ、講堂内を荘厳な雰囲気へと変えている、あのパイプオルガンはなかったのです。

パイプオルガンが講堂に設置されたのは、実は1974年、移転から40年も経ってからでした(ですから来年は設置40周年ということになりますね)。当時、西ドイツのゲッチンゲンにあったパウル・オットー社(Paul Ott C. Ltd.)に依頼して作ってもらったものです(この会社は現在ありません)。この設置の陰には、音楽学部の教職員と卒業生たちの10年近い熱意と努力、多大な寄付金がありました。

神戸女学院では創立以来、礼拝で奉仕できるようになるために、音楽が教えられていました。特に、讃美歌の伴奏をするためオルガンを弾くことは大切なことでした。音楽学部には器楽専攻の中に「オルガン」があり、新しいパイプオルガンがほしいという希望は1965年ころからあったといいます。建物に合わせて置く位置を決め、そこで最高の音響効果をあげられるように設計することなどいろいろと検討され、講堂のギャラリーに設置することで進められることになりました。この時すでに、音楽学部卒業生有志の好意によって音楽学部の施設のための資金が集められていたこともあって、KCC(Kobe College Corporation)でもこの件が検討され、オットー社に依頼することになりました。

しかし、講堂に置くためには解決しなければならなかったことがありました。座席数が減ること、また何よりもギャラリー(2階)に建築構造上の問題があることが分かったのです。一説には設計者のヴォーリズ氏がパイプオルガンの音を好きではなかったため、それを設置できるように設計されていなかった

ともいわれています。ヴォーリズ氏はハモンドオルガンが好きで、よく演奏もしていたそうです。また、神戸女学院にはヴォーリズ氏を記念するハモンドオルガンがあります。ギャラリーが無理なら壁にかけてはどうかという案も検討されましたが、やはり壁の強度の問題がありました。検討の結果、現在のようにオルガンの下の部分に2本の補強の柱を置くことでギャラリーに設置できることになりました。足りなくなった座席数は1階の長椅子の両端に折り畳み式の補助いすを取り付けることで解決しました。

こうして完成したオルガンですが、1995年に起きた阪神・淡路大震災の時にはパイプがバラバラになって壊れてしまいました。しかしこの時もやはり、音楽学部卒業生有志の熱意と寄付金によってパイプオルガンはよみがえり、今もすばらしい音を奏で続けています。講堂横の廊下を通ると、時折オルガンの音色が響いてきます。キャンパスの日常を彩る音と光景です。



完成当時のパイプオルガン

<留学報告>

留学報告

横田 恵子

2012年度に国内留学として神戸大学国際文化学科への一年間の所属をお許しいただきました。今までは一貫して対人支援に関わる実践研究をまとめて参りましたが、この問題系については自分の中でひとつの区切りを迎えた感があり、次のグランドテーマを模索すべくいただいた研究期間でした。所属教室は文化人類学、共同研究者としてお願いしたのが岡田浩樹教授です。

一年という長期にわたりフリーハンドで活動できるということは、私のようなフィールド系の研究者にとっては得難い機会です。新しいテーマを選び直し、それに関して不案内な領域でフィールドを設定し直すには時間がかかり、いくつもの街中での試行錯誤(=徘徊に近い)、紆余曲折と偶然の出会い、そしてひらめきが揃うことで、突然問題関心・研究テーマが具体的に立ち現れるものだからです。「それ」が何なのか／いつなのか、事後にならないとわからないという心躍る期間でもあります。

今回教育や学務を免除していただくことで、心置きなく夜の街をさまよい続け、時には自分もパフォーマーになりながらライブハウスやジャズバーを参与観察した結果、立ち上がってきたのは「市民の音楽実践が紡ぐセミフォーマルな社会ネットワーク」への興味関心でした。週末ミュージシャンとしての自身のアイデンティティの再設定も含めて、どのようなプロダクツに結集するのか、これから5年くらいかけて試して行こうと思っています。

(総合文化学科教授)

愛しのスウェーデン

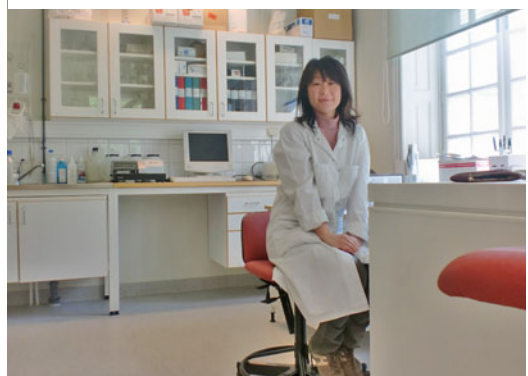
高岡 素子

私は2012年の3月から1年間、スウェーデンのUppsala 大学に留学させていただきました。Uppsala 大学は1477年に創立された北欧最古の大学です。私は医学部の「労働・環境・健康研究所」で、若年層における室内環境と健康との関係について、その分野の第一人者である Norbäck 博士の下で研究しました。近年、世界的に増加傾向であるアレルギー疾患は遺伝や生活習慣だけではなく、環境要因の影響が指摘されており、私はリスク環境要因を探る研究を行いました。

研究所には科学を専門とする研究者の他、医学、心理学、経済学、行動学、統計学と様々な分野の研究者がおり、チーム体制で多方面から研究に取り組むシステムが整っていました。留学当初は久しぶりの学生生活に慣れず、大きな忘れ物をしているような気がして落ち着きませんでしたが、その後は自分の研究だけに集中できる幸せを噛みしめながら生活しました。

スウェーデンの人々は陽気、前向きで大らか。「How are you?」と聞かれたら、必ず「Fine!」と答えることが礼儀です。極寒の長い冬を絶えぬくためのならわしです。私も娘もスウェーデンの大きな腕にハグされながら、今まで経験したこともないストレスのないゆったりとした毎日を過ごすことができました。今も目を閉じると、スウェーデンの広大で神々しい風景が思い出され、胸が熱くなります。

(環境・バイオサイエンス学科教授)



Uppsala 大学の実験室にて

人 事

記 念 賞

慶 弔

個人情報保護のため、一部削除しています。

栄 誉

永年在職者表彰

その他の新刊一覧

飯田祐子（総合文化学科教授） 他著

『よくわかる ジェンダー・スタディーズ』

（ミネルヴァ書房）

『京都近代文学事典』

（和泉書院）

新刊紹介



松尾 歩 訳
安藤 忠・細木玉恵 著

『ダウン症のぼくから
～おなかの中からの
メッセージ～』

あいり出版 2013年5月刊 31頁 1,200円+税

「ダウン症などの染色体異常を調べる新たな出生前診断が開始」。そんな新聞記事を読み、私は何とも言えない不安を抱いた。すでに始まっている新型診断に比べ、費用は8分の1で、年齢制限も設けないということだ。もちろん、障害のある子どもを持つ親の苦労や困難を考えると、「産む産まない」は親の選択であるともいえるかもしれない。ただ、その“苦労”や“困難”は、ダウン症といった障害自体が引き起こしている問題なのだろうか、それとも、それらの障害のある人を包摂できない私たち健常者社会の未熟さにあるのか。私たちが背負うべき責任を、これから生まれる“大きな可能性を秘めた小さな命”に負わせることで終わらせてしまってもいいのかと嘆息してしまう。

障害福祉の研究者でありながら、うまく言葉にできない私のもどかしさを、この絵本は力強くも柔らかい絵と言葉で伝えてくれる。「ダウン症がある→生きていくことが大変→生まれてこないほうが」といった私たちが陥りがちな思考に対して、教示や説得をするわけでもなく、「そうなの？」と作者が優しく問いかけ、私たちに素直に考えさせてくれる。ともすると抽象度の高い議論になりがちなテーマを、こんなにもたおやかに伝えることができる力を、絵本が秘めていることに驚かされ、そして素直に感動した。また、この絵本には、本学の松尾 歩先生の英訳が添えられている。それぞれの場面で、日本語の内容とニュアンスを忠実に表現しながらも、英訳の意味の広がりを感じることができる。これらの英訳と一緒に読むと、作者の想いをより深く理解することができるだろう。ダウン症のことについて知っている人にも知らない人にも是非一度手にとって読んでもらいたい心にやさしい絵本である。

(総合文化学科准教授 與那嶺 司)

新刊紹介



神戸女学院大学文学部総合文化学科 監修
大橋完太郎 編

『日常を拓く知1 <知る・学ぶ>』

世界思想社 2013年8月刊
195頁 1,800円+税

『日常を拓く知』シリーズ(全6巻)は、「学ぶこと」と「生きること」とをつないで日々の暮らしをより輝かせるべく、これから大学で学ぶすべての人々のために編まれたものである。中でも本書『知る・学ぶ』はシリーズの先陣を切るだけでなく、シリーズ全体につらぬく基盤ともなっているようである。そこには、人文・社会学系だけでなく自然科学系も含めたすべての学びへの扉を開く「学びについての学び」が自ずと目覚めていくような仕組みが巧妙になされているのであるが、それこそまさに総合文化学科の腕の見せどころではなかったろうか。

そんな本書の特徴の一つ挙げるとするならばそれは、すべての演者の語りが、研究者の語りであり、教員の語りであり、そして人間の語りであるという奥行きを持っていることであろう。授業という学びの現場を題材とする内容や教える側の思いを語る教員の語りは、学生にとっては身近で確かなものとしていかにも触れられやすい。ところがいざ入ってみると、今度は研究者の語りが読者を知らぬ間に深遠な思索の世界へと引き込んでいる。しかしそれがまた同時に、歴史と日常を生きている人間の、親しみと温かみを湛えた言葉で語られている限りにおいて、読者は創造的かつ現実的な日常が営まれていく可能性へと常につながりつめられているのである。

本書が人文・社会学系の初学生の手引きとして適しているのはもちろんのこと、私が薦める本書の使い方は、特に第1部のところを、専門に関係なく、大学入学前の課題図書あるいは初年次教育のテキストとして用いたり、3年次の卒業研究に取り組む前のウォーミングアップに使うというものである。口当たりは確かな歯ごたえ、後味は無限の奥行きに満ちた、まさに総合文化学科の総合力を伝える一冊と言えるだろう。

(心理・行動科学科准教授 鶴田 英也)

＜オフィスの宝物＞

古い会計帳簿

2012年の春、私たちは、学生寮横の汽罐室で永らく保管していた、大量の古い財務関係資料をメアリー・アンナ・ホルブルック記念館の書庫に移しかえるために、埃に咽ながら、箱詰め作業をしていました。部屋は保存期限を超えた伝票や帳簿類で奥までぎっしりと詰まり、途方に暮れていた時、奥の棚の中段に造作なく山積された革張りの帳簿、数冊に目が行きました。手に取り頁を開くと、インクで書かれた数字が並び、米国人らしき署名が数か所にありました。日付を見ると、1930年代、この帳簿は他とは全く異質のものでした。そこで、史料室の佐伯さんに確認してもらったところ、米国伝道会および在日伝道団の会計帳簿らしいとの事で、その中には、財務主管のハケット氏の署名もありました。また、帳簿には、たくさんの“Gift from ○○○”という記載がありました。『神戸女学院百年史 総説』によると、岡田山キャンパスの敷地は、同窓会による精力的な募金活動で購入した大蔵谷の土地を、竹中工務店の篤志により、有利な条件の土地交換で取得し、また、ヴォーリズ建築による美しい校舎群の建設にあたっては、デフォレスト院長の理想を実現するために、信徒の祈りに支えられ、在米神戸女学院財団（KCC）が全米で募金活動を展開し、70万ドル（当時188万円、現在の約105億円に相当）という大きなお金が捧げられたと記されています。このずっしりとした帳簿を手に取り、頁をめくると、そのほかにも、いろいろな方面から様々な支援が寄せられた事がわかり、海を越えて本当に多くの人々の夢と希望と祈りに支えられ、喜びに満たされて、岡田山キャンパスがスタートした様子が感じられます。第一次大戦後の不況、関東大震災、金融恐慌、満州事変…、と時局がいよいよ急迫する中、恐らく、関係者の活動は、日米双方とも、周囲から凄まじい逆風を受けたことでしょう。それにも拘らず、これだけの事が成就したのは、関わった人々の強い思い、覚悟、信仰による奇跡と言えるのではないのでしょうか。

（経理課長）



人間科学部事務室の宝物

今年は岡田山へのキャンパス移転80周年の年にあたります。人間科学部事務室はその歴史あるヴォーリズ建築の1つである理学館にあり、学生・院生が学業に専念できるよう教員と連携してサポートに努めています。また、附属機関である心理相談室、副専攻制度の「地域創りリーダー養成プログラム」、2009年度から実施している「地域からESD（持続可能な開発のための教育）を推進する女性環境リーダー」プロジェクトの運営もサポートしています。

さて、そんな人間科学部事務室の宝物とは何でしょうか。

人間科学部は、心理・行動科学科と環境・バイオサイエンス学科、大学院人間科学研究科を擁し、サイエンス体験や関西初のPCIT（親子相互交流療法）に関する公開講座等、学外の方を対象にした様々なイベントも行なっています。

そのため理学館では、各種心理検査や実験実習に使用する器材・機器、薬品、鉤や長靴、研究対象であるメダカやハチといった、他の校舎ではなかなかお目にかかれないであろうものたちと出会うことができます。そんな出会いを経て実験や実習に臨む学生たち、教育・研究熱心でありながら気さくな先生方、心理相談室の非常勤カウンセラー、思いやりの気持ちを持って業務に励む職員たちとの関わり。このような物的・人的な環境が人間科学部事務室の宝物です。

時には薬品の香り、時には実験による成果物の香りに包まれる理学館から、学生・院生・留学生の皆さんがそれぞれの宝物を見つけられることを陰ながら祈っています。

（人間科学部事務室）

大学報告

共通英語教育の教育方針について

英語教育問題検討ワーキンググループを中心に議論し、ミッションステートメントに掲げる「共感性の高い人材」を育てグローバルな場で活躍できるようにすることを旨として本学の共通英語教育を強化するため、2013年4月に共通英語教育研究センターが設置されました。2014年度の新カリキュラム開始に向けて、センターで考えているさまざまな具体的方法をご紹介します。

まず本学をテーマにしたオリジナルテキストを使い「文法」の復習と精読をし、文の構造をしっかり学び「読解力」を高めます。同時に Graded Readers や絵本で多読も行います。『自力で英語の本が読めた』という経験は英語嫌いを克服するのに良い方法です。また同テキストの Exercise をすることで簡単な文章を「書く」指導もします。「話す」と「聴く」については、発音を徹底的に矯正し、コミュニケーションスキルを高め、プレゼンテーション・ディスカッションの基礎力を身につけます。

これらの基礎的な英語教育を土台にし、本学独自の教育方法を考えています。第一は「オリジナルテキスト」で本学の歴史・各学科の教育内容・学生生活・卒業生の進路・キャンパス等について英語で学ぶことです。全学的にオリジナルテキストを使っている大学は東京大学、九州大学等限られた大学なので本学の一つの特徴になると考えます。大学について書かれたテキストで学ぶことで、学生一人一人が自分自身・大学について英語で語る練習ができ、グローバルな場で必須の自己アピール力の基礎となります。またテキストの英単語を学習できるオリジナルスマホアプリも使用します。この試みは全国初だと思います。

第二は各学科の「専門分野に関連する英語教育」です。専門書を読み、海外の同じ分野の人たちとコミュニケーションをするための準備をします。専門英語教育は、医学・工学の分野以外ではまだ本格的に行われておりませんが、全国に先駆けて本学全学科で行います。学生が1年生から自分の専門分野に対する興味を深めかつ英語学習のモチベーションを高められる大変良い方法だと考えています。

第三に「English Honors Program (仮称)」も検討しています。優れた英語運用能力を持つ全学科の学生を対象に、自分が目指す分野において英語で活躍できる力を4年間で培います。目標は、1) 2年生

後期から自分の目指す分野で欧米大学の専門課程に留学(派遣留学)する。2) 留学終了後グローバルに活躍するための Professional Skill を身に付けることです。

第四は、「課外の英語学習サポート」です。昨年度の卒業生アンケートで「在学中にしておけばよかったこと」の第一位は「英語学習」で4～5人に1人がそのように答えていました。今後そのような後悔がないようサポート体制を考えております。

まず、「English Café」(英語学習を希望する学生への授業外の勉強会)を今年6月から試しに始めています。夏休みも開き、後期も毎週1回開いています。学生が希望する学習形態ならどのようなものにも対応いたしますが、現在が一番希望者が多いTOEICの問題を解いています。現在登録者は約50名で、全学科全学年の学生に加えて大学院生も参加しています。今後この勉強会をもっと充実したものにしていきたいと思っています。

さらに、英語のことで困った場合「英語駆け込み寺」を作り、いつでも相談に来る事のできる体制も作る予定です。

2014年4月より同センターのスタッフが増えますので、授業だけでなく授業外の学習についても万全の体制でサポートいたします。同時に常に新しい教授法を研究し、最善の方法を取り入れ検証し、その成果を国内外に発信して、本学独自の共通英語教授法を確立し、全国の大学から注目される存在になれるよう努力いたします。しばらくは試行錯誤の時期が続くと思いますが、どうかご支援・ご協力をお願いいたします。

(共通英語教育研究センター教授 川越 栄子)



English Café

子どものための七夕コンサート (子どものためのコンサート・シリーズ第36回)

「子どものための七夕コンサート～わたしらしくくらしく♪～」(子どものためのコンサート・シリーズ第36回)を7月6日(土)に講堂で開催しました(11時と15時半の2回公演、来場者計665名)。

出演は「音楽によるアウトリーチ」履修生を中心とする音楽学部の4年生10名で、自分たちの楽器編成(ピアノ、声楽、フルート2、ハープ、ホルン)に合わせた編曲(ミュージック・クリエイション専攻生による)で、アーレン作曲《虹の彼方に》、モーツァルト作曲《きらきら星変奏曲》、ビゼー作曲《カルメン》より《ハバネラ》等を演奏しました。声楽曲では、ゆったりしたマスカーニの《アヴェ・マリア》ときびきびしたモーツァルトのオペラ《後宮からの誘拐》のアリア《なんとという幸せ、なんとという喜び》を続けて演奏し、その違いを感じてもらいました。

子どもたちに「私らしい、僕らしい」自由な発想で音楽を聴いてほしいという願いから、曲を聴いて思い浮んだ色を客席の子どもたちにインタビューして、その色の星を映写機で壁に映し出したり、ドビュッシーの《喜びの島》を聴いて感じたイメージを絵に描いてもらったりといった工夫をしました(絵は集めて廊下に展示し、終演後に自由に見てもらいました)。

また、音楽学部の学生にとって中心的なレパートリーである「クラシック」もしっかり聴いてほしいという考えから、プーランクの《フルート・ソナタ》第3楽章やドビュッシーの《前奏曲集》第2集より《花火》も演奏しました。

最後に、《手のひらを太陽に》《幸せなら手をたたこう》《たなばたさま》の3曲を子どもたちと一緒に歌うと、会場が温かな空気に包まれました。

終演後には恒例の楽器体験コーナー(ハープ、フルート、ホルン、トーンチャイム、ウインドチャイム)に行列ができて、子どもたちで賑わいました。

今回はアンサンブル曲も暗譜で演奏し、舞台でのお話も出演者全員がお客様の顔をしっかりと見ながら話すことができたので、よく伝わるコンサートになりました。出演者各人が自覚をもって臨んだ結果がよい形で現れて、充実したコンサートになりました。

(音楽学部アウトリーチ・センター長 津上 智実)



客席と一緒に《幸せなら手をたたこう》

企業訪問 ～企業との関係づくり～

キャリアセンターでは、夏から秋にかけて職員が企業を訪問し、採用担当者と情報交換を行っています。この取り組みは特に2011年度から強化しており、今年度は昨年度を上回る数の企業を訪問する予定です。現在も学生対応や学内での講座の傍ら、日々訪問活動を行っています。訪問対象としては、最近学生が内定を得た企業を中心に、過去に採用実績がある企業や、ぜひ今後つながりをもちたい企業などです。

企業訪問の目的は、採用担当者と会話を通じて企業の考えや採用動向を把握するとともに、本学の学生の良さをアピールし、求人票獲得や学内で学生と接点を持ってもらうための企画(学内セミナーなど)を提案することです。また、企業が求める人材像を把握することで、それに合う学生に企業を紹介することにもつながっています。

採用担当者と情報交換の中から、企業が学生を見る視点を理解することができ、学内でのガイダンス・セミナーや学生の個別支援にも役立っています。また、業界動向や採用動向を把握することは、職員の知識向上だけでなく、学生に対する就職支援企画策定の参考にもなっています。

学生と日々接するキャリアセンター職員が企業とも接点を持つことで、企業と学生の架け橋となり、学生の就職活動にも大きく貢献できると考えています。今後もこの取り組みは強化し、企業との結びつきをさらに強めていく予定です。

(キャリアセンター)



ANA 大阪空港(株)での訪問風景

第4回絵本翻訳コンクール

多くの高校生に、絵本の翻訳をととして世界の多様な文化に興味をもってもらい、「神戸女学院大学の翻訳」の認知度を向上させたいとの意図でスタートした本コンクールも今年で4回目。北海道から沖縄まで、昨年度を大幅に上回る234校（昨年164校）より1191作品（昨年652作品）もの応募があり、高校生の皆さん、そして指導教員の皆さんの英語教育や絵本翻訳への熱気を感じさせました。

毎年、なじみのない異文化とふれあうことをテーマにしていますが、今年度の課題はアメリカで出版された *Moses Goes to a Concert*。耳の聞こえない男の子を主人公に、アメリカ手話（ASL）を正確なイラストで子どもにわかりやすく紹介した絵本です。拍手のかわりに手をふる、振動で音楽を楽しむなど、聴者の文化とは異なる「ろう文化」を知って訳すこともポイントの一つ。表彰式の際、院長あいさつにあった“Reality is not real.”という言葉のとおり、文化が異なると経験も異なります。応募作もその点に苦勞したようですが、受賞作はそれぞれに創意工夫をこらし、立派な作品に仕上がっていました。今回も審査員3名（卒業生で翻訳家・児童文学者の松岡享子氏、本学の豊倉省子非常勤講師、田辺）が審査し、受賞校は最優秀賞が横浜共立学園高等学校、優秀賞が静岡雙葉高等学校、佳作は京都府立嵯峨野高等学校、ぐんま国際アカデミー高等部、岡山県立岡山城東高等学校の3校でした。優秀賞の生徒は昨年に続く連続受賞、佳作の嵯峨野高校は一昨年に続く入賞でした。

（英文学科教授 田辺 希久子）



11月16日(土)めじらウンジで
受賞者・指導教員・ご家族を招いて表彰式を開催

「地域からESDを推進する女性環境リーダー」シンポジウム “Local Community, Woman, and ESD: Networks Linking Asia and Japan”

11月16日(土)、本学エミリー・ブラウン記念館202号教室において、ご来賓に河野昌弘西宮市長、山下廣順プログラム主管（JST）、登壇者に平川伸明氏（JICE）、海外の大学教授陣（アテネオ・デ・マニラ大学、サムラトランギ大学・ダナン大学・華南師範大学）、小川雅由氏（NPO 法人 LEAF）、長手聖美氏（同）、ESD プログラム第1期修了生1名をお迎えし、人間科学研究科 ESD シンポジウムを開催いたしました。本シンポジウムの冒頭には飯 謙学長からのご挨拶もいただき、午前〈ESD プログラムの成果から女性環境リーダーの役割を考える／司会 遠藤知二教授〉・午後〈地域・女性・ESD 日本とアジアを結ぶネットワーク／司会 寺嶋正明教授〉の2部構成にて行われました。午前の部では、フィリピン、インドネシア、ベトナム、中国、日本における「女性環境リーダーの果たす役割」について比較検討しました。午後の部では、本学からも遠藤教授、Velma I. Grover 客員准教授、武中の3名が報告を行いました。日本国内の ESD の実践事例を用いながらの報告や ESD をめぐる国際的な事情についての報告を受け、ESD と女性、ESD と地域社会の関係を軸としたテーマや現在の ESD プログラムの意義、今後の ESD プログラムの展開可能性についても議論を深めました。

多くの方々のご尽力のもとに、本シンポジウムを盛会に終えることができましたこと、心より御礼申し上げます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

（環境・バイオサイエンス学科特任助教 武中 桂）



シンポジウム当日の様子

<留学生紹介>

Enjoy Your Life Here at Kobe College

2013年度、新たに6名の留学生を本学に迎えました。4月から1年間、米国・ロックフォード大学より1名、7月まで、米国・チャタム大学より1名と韓国・徳成女子大学より1名を迎えました。9月から1年間、中国・広東外語外貿大学より1名、同じく9月から1月まで韓国・徳成女子大学より2名を迎えました。国際教養専攻、教育・児童学専攻、日本語・日本文学専攻、文化史・歴史専攻の4名は総合文化学科に所属し、精神生物学専攻の1名は心理・行動科学科に所属されました。もう1名は1年間本学大学院文学研究科にて修士論文に取り組んでいます。また、日本語の授業、各専門分野の他、英語で行われる“Introduction to Japanese Culture”と“Current Issues in Japan”も本学学生と受講しています。生活面では、日本での良き友人として留学生の日常生活・学修両面を支援する『留学生バディ制度』を通して、本学学生との交流を深めています。今年度は留学生と留学生バディの総勢18名で西宮まつりにも参加し、留学生の地域交流がよりいっそう深まりました。皆様にも、留学生達がより実りある生活を送るための助けとなっていただければ幸いです。

(国際交流センター)



留学生歓迎会

<受入れ留学生報告>

広い世界へ進める第一歩

徳成女子大学交換留学生

桜が満開した4月初め、ずっと待っていた日本へ到着しました。飛行機の中で、これからの私の留学生活が、うまくいくように、お祈りをしました。初めて訪れた神戸女学院は自然に囲まれて、韓国の大学とは違う雰囲気でした。私は都会より、自然豊かなほうが好きで、ここで勉強できることが嬉しかったです。前期の留学生の中で、韓国人は私一人だけでした。留

学する前、心細くなりホームシックになることを心配しましたが、日本に着いた後は、神戸女学院の学生のように、毎日楽しい生活を過ごすことができました。むしろ、日本語を使わないと生活ができない、この環境がより魅力的だと気付きました。

一般の授業は、韓国で経験できなかったことを学びました。日本語学の授業では、日本語の体系を外国語ではなく、国語として学ぶことが楽しかったです。自然に囲まれた環境を利用して、外へ出て草、花、鳥などを観察しながら、今まで知らなかった植物と動物について興味を持てるきっかけになりました。日本語で論文を書いたこと、毎週新しい課題について論理的に話をしたこと、日本語の教え方の勉強をしたことなど、留学生の授業もすぐ役に立ちました。私の将来の方向を考えられた大切な時間でした。韓国語の授業で、ボランティアとして、正しい発音をしたり、日本語と韓国語の微妙な違いを説明したりしました。日本語を学び始めた、私の1年生の姿を思い出しました。その初心をもう一度考えて、前へ進める原動力になりました。

寮の友達と一緒に韓国料理を作って食べたことも大切な思い出です。また、神戸、大阪、京都など、西日本のいろんな地域を旅行したことや、夜行バスに乗って東京へ行ってきたこと、宝塚歌劇を見に行ったこと、にぎやかな祭りを見たことなど、ひとつひとつの経験が心に残っています。

留学する前に私が書いた学業計画書をもう一度読んでみました。今振り返ると、学業計画書に書いてあったことはもちろん、その時は思いもよらなかったことまで神戸女学院で経験しました。ちょうど1年前に書いた文が、今とは違う考え方でびっくりしました。成長したことが分かって嬉しかったです。これからももっと広い世界が私を待っています。韓国へ帰っても、この留学生活が私の人生に、また新しい機会を与える第一歩になるように、私を磨きます。

いつも交換留学生の後ろで、面倒を見てくださった国際交流センターの職員の方、寮の先生方ありがとうございました。会う度に笑顔で挨拶してくださって毎日喜びました。そして、授業の先生方、私の足りない日本語能力のため、お疲れ様でした。また、留学生バディ、学校の友達、留学生たちのおかげで心細くなることなく、はつらつな生活を過ごしました。いい人に恵まれて幸せです。残り時間、もっと輝けるように頑張りたいと思います！

<派遣留学報告>

ロックフォード大学

一生の宝物

文学部 英文学科 4年生

2012年の8月から今年の5月中旬まで、私はアメリカのロックフォード大学に派遣留学をしていました。シカゴより南に位置するのどかな町にある小さな大学で、留学生自体が比較的少なく、日本人にいたっては私ひとりという状況でした。語学学校とは違い、学部留学でしたので、現地の学生と同じように授業に参加し、単位を取得しなければなりません。自分自身英語で授業を受けることに慣れていると思っていたのですが、行ってみると「今までの英語はなんだったのか」と思うほど、先生や生徒たちの話す英語が早く、始めは授業についていけなくて精いっぱいでした。秋学期は図書館にこもって翌日の予習や課題に追われた日々でしたが、春学期は余裕を持って過ごせました。留学生だけでなく、現地の友達もたくさんでき、クリスマスにはアメリカ人の友人の家にお世話になり、「本物のクリスマス」というものを味わうことができました。楽しいことばかりではなく文化の違いに苦むことも少なくありませんでしたが、この留学で経験したこと全てが、自信に繋がりました。自分で考え積極的に行動しなければ、チャンスはやって来ません。ロックフォード大学で学んだことは私の一生の宝物です。留学をサポートしてくださった職員や教員の方々、KCCの方々、そして家族や友人達に心から感謝を申し上げます。本当に有難うございました。



イリノイ州の州都、スプリングフィールドにて、リンカーンの像と一緒に。

梨花女子大学

留学生活で得たもの

文学部 総合文化学科 3年生

私は大学2年生の後期から約10ヶ月を韓国の梨花女子大学で過ごしました。

留学を振り返って一番初めに思い浮かぶのは、留学中に会った、世界中の友達存在です。外国で生活するうえでトラブルや悩みはつきものですが、私も留学中にいくつかの問題に直面しました。例えば、授業の課題やプレゼンの準備、言語の問題、そして文化の違いなどです。ある授業ではプレゼンと課題に追い詰められて、途方に暮れて号泣したこともありました。その時は申し訳なくなるくらいクラスメイトに助けてもらい、なんとか乗り越えました。また体調を崩した時、その日の食事や栄養ドリンクを持ってきてくれた友達もいました。

帰国した今、友人のあたたかい支えがあったからこそ、留学生生活を全うできたと確信しています。留学中に得られたことを挙げるとすれば、「積極性」「粘り強さ」「語学力」「新しい価値観」などいろいろありますが、一番大きな財産は「世界中の友達との縁」であったと思います。留学中の友達とは今も連絡を取り合っています。今留学を考えながら「少し怖いな」と思っておられる方も、困ったときには必ず助けてくれる友達がいるので、あまり心配しないで大丈夫だと思います。

最後になりましたが、留学生生活を最後までサポートしてくださった国際交流センターの皆様、物心両面で支えてくれた両親、そして友人に心から感謝申し上げます。本当に有難うございました。



漢江（ハンガン）にて友人とサイクリング

徳成女子大学

「ケンチャナヨ！」の国で学んだこと

文学部 総合文化学科 3年生

2013年2月末から約半年間、韓国の徳成女子大学に留学させていただきました。

現地に到着し、まず驚いたのは入寮予定の建物が工事中で、一時的に別の寮に宿泊したことです。

新学期が始まると、語学堂での韓国語の学習のほかに、英語と韓国語の授業を受講しました。韓国語の授業はかなり苦勞しましたが、日本語学科の学生に助けってもらい、何とか乗り切ることができました。

また、語学堂で知り合った中国人留学生と言語交換を始めたところ、漢字という共通の文化を持つことに互いが感動し、より一層親しくなりました。

最初に書いた寮の工事もそうですが、計画通りに物事が進まないときでも「ケンチャナヨ（大丈夫）！」で済ませてしまうのが韓国流です。

こうした大らかな一面を持った韓国の人々ですが、日本人に対して友好的に接してくれるからといって、決して「歴史問題」が存在しない訳ではありません。それは、アジア各国からの留学生にもいえることで、私の留学の志望動機でもあった、「日本を離れてアジアを学ぶ」厳しさを痛感することとなりました。

留学中には北朝鮮のミサイル危機も起こりましたが、すべての日程を無事に終えて帰国できました。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった神戸学院大学と徳成女子大学の先生方や、留学を支えてくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。



バディと見学した警察博物館にて

<語学研修報告>

カリフォルニア大学アーバイン校

出会いそして発見の日々

文学部 英文学科 1年生

私は1ヶ月間カリフォルニアのUCIでBusiness Englishについて学びました。この授業は毎日の宿題と予習、プレゼンや討論など本当に忙しかったのですが、ビジネスだけでなく社会にでて役に立つことなどたくさん学ぶことができました。20、30、40、50代と幅広い年齢層、いろんな国から来た人達がクラスメートだったことで私は彼らから日々刺激を受け、時には自分の無知さにどうしようかと思いました。知らないからこそ毎日新しい何かをたくさん吸収することができたのでその分学ぶことがたくさんありました。また、アメリカンスタイルの授業を受けることにより、積極的に手を挙げて質問をする、自分の主張を述べることの大切さも肌で感じました。

こうして日本にいては関わることのなかった人たちと一緒に1ヶ月間過ごしたことで感じることや学ぶことがたくさんありました。1ヶ月間一日一日がすごく濃く、この研修を通していっぱい学び、経験をし、大好きなアメリカに浸り、いろんな考えを持った人と出会い、多くの人に支えられ、大切な友達やホストファミリーもできて、自分自身たくさん成長でき自分の価値観も大きく広がりました。この研修に行っておいでと背中をおしてくれた家族、この研修の手続き等でお世話になった先生や国際交流センターの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。そして改めて自分は本当に幸せだと思います。この経験を自分の強みとして次にかけるようこれからも頑張っていきます。



友だちと

ヨーク大学

カナダでの一期一会

文学部 英文学科 2年生

7月30日から8月25日まで、カナダのヨーク大学へ語学研修に参加させていただきました。

私は英会話をする機会がはしくて、今回の参加を決めました。私は英文学科で先生がすべて英語で行う授業を受けていましたが、学生同士で英語のディスカッションをする機会ほとんどありませんでした。まず、海外の留学生の英語力の高さに驚きました。積極的に英語で発言する留学生たちに刺激され、最初はあまり発言できませんでしたが、自分の意見を英語で伝えられるように努力しました。

課外活動ではボーリング、テーマパーク、美術館、ナイアガラの水、大リーグの観戦などを体験しました。私はこの活動が大好きでした。なぜなら、課外活動では授業よりも海外の留学生と関わることができたからです。嬉しいことに、海外の留学生と友達になり、英語を話す機会が増えました。仲良くなった友達とは予定を立てて、一緒に週末を楽しみました。

この語学研修を終え、もっと上手に英語を話せるようになりたいという思いも強くなりましたが、何より英語を通じて、素敵な人とたくさん出会えたことが大きな財産となりました。友達となった海外の留学生と共に過ごした1ヶ月は、私にとってかけがえのないものです。毎日を充実した一日にすることができ、この研修に参加して本当に良かったと思います。この研修を支えてくださった職員の方々や友人、そして私に貴重な経験を与えてくれた家族に心から感謝しています。



ニューカッスル大学

イギリスでの貴重な体験

文学部 英文学科 2年生

私は夏休みの約1ヶ月イギリスのニューカッスル大学で語学研修に参加しました。雨が降ったりやんだりで気候の変化が激しいと聞いていましたが、私がいた時には雨はほとんど降らず気温は20度前後と過ごしやすい地域での研修となりました。

毎日他国の学生とはもちろんイギリス現地の人や様々な国から来ている先生、職員の方との交流がたくさんありました。授業はコミュニケーション中心で、Facebookの問題や宇宙旅行について議論しました。討論していくことで、自分の中に国を越えた新しい考えがどんどん蓄積され、母国語の違う人と意思疎通ができたことに感動し世界共通語である英語のすばらしさを実感しました。休日にはエディンバラやヨーク、ハリーポッターの撮影が行われたお城や教会など多くの観光地に行き、煉瓦造りの建物や穏やかな空気に魅了されました。寮には共同キッチンがあり留学生同士でお互いの国の料理を振る舞い合ったことも思い出の一つです。

イギリスでの研修は大学で授業を受けるのとは違い文化や国の違いを、日常生活を通して肌で感じ貴重な体験を数え切れないほど多くすることができました。そして英語のすばらしさを再確認し、イギリスで皆の優しさの中での生活を通して人としても成長することができた実感しています。両親やこの研修でお世話になった全ての人に感謝しています。今回の研修で感じたことを忘れず学んだことを活かし、さらに成長し続けたいと思います。



寮の共同キッチンにて

西オーストラリア大学

一回り成長した私へ

人間科学部 心理・行動科学科 2年生

私は今年の夏期長期休暇を利用した、西オーストラリア大学での語学研修に参加いたしました。英語が得意なわけでもなく、海外へ行くことすらほとんどなかった私にとって、この研修で得た経験は新鮮で、勉強になることばかりでした。

学校の授業では英語力に自信のなかった私でも、先生のわかりやすい説明によって、理解することができました。また日本で習ったことと、実際に使われる英語の違いがあることを知り、衝撃を受けました。少人数のクラスなので、積極的に質問したり、国籍の異なる友達ができたりしたことが良かったです。

今回の研修で私が出会ったオーストラリアの人々は、つたない英語しか話せない私にも非常に優しく接してくれました。教職員の方、道を尋ねた方、通学する際に利用したバスの運転手などお世話になった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。中でも、ホストファミリーからは多くの愛情を感じました。一緒に食事へ行ったり、パーティーに参加させていただいたり、困った時には助けてくれたり、まるで本当の家族のように接してくれたことがとても嬉しかったです。また、勉強に対する姿勢にも刺激を受けました。今回出会った学生が夢を語っている姿を見ると、私も負けてられないと感じました。不安も多かった研修ですが、参加して得たものは一生消えません。この研修への参加を支えてくださった全ての方に感謝して、この経験を活かした更なる成長を決意します。



クラスで

音楽学部夏期講習会報告

2013年音楽学部夏期講習会は、7月30日(火)～8月2日(金)の日程で開催いたしました。本学の音楽教育への取組を少しでも多くの皆さんに知っていただき、実際の指導現場を体験してくださることを目的として、昨年度から講習会の受講は無料にいたしました。今年の講習会には昨年度を超える242名が参加し、本学の多彩な授業体験や、キャンパスの雰囲気を感じ取っていただく機会になったと思います。



講習会のスケジュールは、器楽専攻、声楽専攻及びミュージック・クリエーション専攻については、聴音、楽典のテスト及び授業と、各専攻教員による個人実技レッスンの実施。またザビエル・ラック先生のフルートと岡田 将先生のピアノ演奏のミニコンサート、さらに、講堂において松居直美先生のパイプオルガンコンサートに耳を傾ける楽しいひと時となりました。



また舞踊専攻はリズム・ソルフェージュ授業、そして教員陣による実技レッスン指導。また島崎 徹教授の特別講座、さらに舞踊専攻生による「ショート・パフォーマンス」が披露されました。



進学相談会では、参加生徒達の今後の夢を叶えるべく、さまざまな質問や相談に対応いたしました。
(音楽学部事務長)

保護者懇談会報告

今年度の保護者懇談会は4回行われました。まず全学科1年生保護者対象の懇談会が、6月1日(土)15時30分から家庭会大学部会総会に引き続き、本院講堂で開催されました。出席保護者数は約80名。学生生活支援センター課長の司会によって、学生部長の挨拶と1年生学生主事紹介の後、履修カリキュラム、就職状況・就職活動、学生生活全般(クラブ活動、奨学金、留学)に関する説明が各部署の職員によって行われました。また今年度新たに、個別懇談が各学科の学生主事によって実施されました。

地方会場ではまず岡山県、広島県、鳥取県、島根県、四国地区在住全学年保護者対象の懇談会が、6月15日(土)11時30分から岡山コンベンションセンターにおいて開催されました。出席保護者数は41組、54名でした。学生生活支援センター課長の司会によって、学生部長の開会祈祷、学生副部長の挨拶、学長の学事現況報告、学生部長の講話、キャリアセンター課長の最近の就職状況説明が行われました。昼食(懇談)をはさんで、午後から個別懇談が実施されました。次に東海地区、長野県、山梨県在住全学年保護者対象の懇談会が、7月20日(土)11時30分から名古屋国際ホテルで開催されました。出席保護者数は25組、30名でした。学生生活支援センター課長の司会によって、学生部長の開会祈祷、学生副部長の挨拶、学長の学事現況報告、学生部長の講話、キャリアセンター課長の最近の就職状況説明が行われました。昼食(懇談)をはさんで、午後から個別懇談が実施されました。

最後に全学科2年生保護者対象の懇談会が、10月26日(土)10時30分より文学部2号館45教室とエミリー・ブラウン記念館で開催されました。出席保護者数は58組、66名でした。学生生活支援センター課長の司会によって、学生部長の開会祈祷と挨拶、飯学長の学事現況報告の後、カウンセリングルーム専任カウンセラーの講演が行われました。そのあとで個別懇談が各学科、各部署に別れて実施されました。いずれの会も和やかな雰囲気の中に無事終了しました。今年度ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

(学生部長)

夏期インターンシップ実施報告

インターンシップは、学生にとって、実際の仕事や職場の状況を知り、自己の職業適性や職業生活設計など職業選択について深く考える契機となります。本学では、多くの企業や自治体・事業体のご協力を得て、キャリアセンターが学生に就業体験を行う機会を提供しています。

ひと口にインターンシッププログラムと言っても、営業同行のような形で実際に就業体験をするプログラムから、グループワークなどを通じ課題に取り組み、プレゼンテーションを行うプログラムなど、多種多様なプログラムがあります。学生は、自分の希望業界や体験したいプログラムに応じて、各種のインターンシップに参加します。

この夏のインターンシップでは、以下の企業、自治体、団体の皆様のお世話になりました。記して、心よりの感謝の意を表します(かっこ内は受け入れてくださった本学学生数)。

兵庫県庁(7名)、北海道庁(1名)、西宮市役所(2名)、尼崎市役所(1名)、兵庫県経営者協会/神戸市立中央図書館(1名)、兵庫県経営者協会/神戸マツダ(1名)、兵庫県経営者協会/ホテルラ・スイート神戸(1名)、姫路経営者協会/姫路信用金庫(1名)、和歌山県経営者協会/和歌山市役所(1名)、和歌山県経営者協会/和歌山県教育委員会(2名)、山口県インターンシップ推進協議会/山口放送(1名)、福井県経営者協会/福井銀行(1名)、三菱UFJリサーチ&コンサルティング(1名)、野村證券(3名)、三井住友海上火災保険(8名)、JTB西日本(1名)、日本旅行(3名)、名鉄観光サービス(1名)、ホテルオークラ神戸(1名)、ECC(1名)、ワークアカデミー(1名)、カース・キャリアセンター(1名)

KCC/KC インターンシッププログラム/Japan America Society of Chicago(1名)、Ten Thousand Villages(1名)、Anderson Japanese Gardens(1名)

学生のインターンシップに対する関心は高く、4月と6月に各1回行われたインターンシップ・ガイダンスでは、合わせて500人を超える参加がありました。またアメリカに学生を派遣するKCC/KCインターンシップの説明会、および派遣学生による報告会にもそれぞれ30名程度の学生が集まりました。

こうした熱心な要望に応え、今後とも、学生の精力的な活動を励まし続けたいと考えています。

(キャリアセンター)

海外インターンシップを終えて

人間科学部 心理・行動科学科 3年生

私は8月26日から9月20日まで、KCCのプログラムで、アメリカのイリノイ州・シカゴでインターンシップに参加してまいりました。私がお世話になったのは、Japan America Society of Chicago（シカゴ日米協会）という非営利団体です。日米間の交流を目的とし、シカゴでイベントや英語・日本語のクラスなどを行っています。常在の職員の方は3名で、週に何日か現地のインターンシップ生がやってきます。私の主な仕事は、電話対応、翻訳、クラスの名簿の作成や、クレジットやキャッシュの決済などでした。また、イベントや会議にもスタッフとして参加させていただきました。初めてのアメリカで最初は緊張していました。しかし、皆さんがとても温かく迎えてくださり、親切に指導をくださったおかげで、とても楽しく充実したインターンシップとなりました。アメリカに滞在している間は、2軒の現地のお宅にホームステイさせていただきました。それぞれタイプが違う家族で、様々なアメリカの文化に肌で触れることができました。今回のインターンシップで、働くことの大変さと、それ以上に楽しさを学ぶことができました。また、現地で暮らしている日本人の方にもたくさんお会いする機会があり、可能性は私が考えている以上にたくさんあることを知りました。今回学んだことを、これからの選択に活かしていきたいと思います。



ミシガン湖のそばで

インターンシップ参加報告

人間科学部 心理・行動科学科 3年生

私は尼崎信用金庫と三井住友海上のインターンシップに参加させていただきました。

まず尼崎信用金庫のインターンシップに参加しました。当初は、金融業界は堅く冷たい人が多いのではないかという印象がありました。しかし、インターンシップを通じ、信用金庫ならではの地域住民との触れ合いなど、温かい一面を知ることができました。また、尼崎信用金庫の国際部や閉店後の業務などを見学させていただくことができ、インターンシップに参加しなければ絶対に得ることができない貴重な体験をさせていただくことができました。

次に参加した三井住友海上のインターンシップでは、グループディスカッションを通して「自分の課題は主張力、発言力である」と気づきました。また、会社の雰囲気というものは、本や企業のホームページを眺めているだけではわからないものであり、自分の目で見てみるのが大切であると感じました。

尼崎信用金庫と三井住友海上の2つのインターンシップに参加したことで、同じ金融業界であっても会社によって雰囲気が全く違うということを学べたことは、貴重な経験となりました。

今回インターンシップに参加して他大学の学生や社員の方と交流することで、視野が広がったように思います。今後は自信を持って就職活動に挑めるように自分と向き合い、弱みを克服していけるように日々努力したいです。



インターンシップ先でできた友人と

2013年度大学職員 SD 研修会

今日の大学において、職員の学びのテーマは数多くあります。それを少しずつ皆で研究し深め合うことがSD研修会の目的です。研修への参加とともに、企画から開催にいたる全ての運営を数名の実行委員が担うこともまた研修の一環です。本年は6名の委員と大学事務長が、これまでも増して積極的に、これに取り組むことになりました。

本年度は、学生の夏期休暇中の8月9日(金)と9月4日(水)に、それぞれエミリー・ブラウン記念館201号教室とメアリー・アンナ・ホルブルック記念館301号教室で、半日のミニ懇話会と一日研修会を実施いたしました。更に2014年3月にも第3回研修会として、半日のミニ懇話会の開催を予定しています。ここでは既に開催した2回の研修会の内容についてご報告いたします。

①第1回大学SD研修会(ミニ懇話会)

日時：8月9日(金) 13:00~15:30

場所：エミリー・ブラウン記念館201号教室

参加者：55名(学長、講演者を含む)

司会：大学事務長室職員

開会礼拝：文学部事務室職員

講話と実技：「車椅子を使用するひとへの対応について」

講師：甲南女子大学看護リハビリテーション学部理学療法学科講師 永田昌美氏

本学のキャンパスは、車椅子を使用する学生や来学者にとっては、不便な状況にあります。その現状を認識し、負担を軽減できるよう、また、必要とあれば適時に適切な支援の手を差し伸べることができるように、理学療法士の先生をお招きし、そのご経験による知識や技術を、パワーポイントや実際に車椅子を使って、分かりやすくご教示いただきました。最後に、参加者全員がペアを組み、介助する側とされる側の立場を経験し、対話やボディメカニックスの活用の重要性を体感しました。

②第2回大学SD研修会(一日研修会)

日時：9月4日(水) 10:00~15:40

場所：メアリー・アンナ・ホルブルック記念館301号教室

参加者：65名(学長、チャブレン補を含む)

開会礼拝：松田 央大学チャブレン補

<午前の部>

司会：文学部事務長

講話「共通英語の取り組み」

川越栄子共通英語教育研究センター教授

講話「リベラルアーツ&サイエンス教育の改革」

飯 謙学長

講話「『共通英語新カリキュラム』について」

教務課長

<午後の部>「危機に備える」

司会：キャリアセンター職員

AED 実践体験 (指導) 保健診療所職員

講話「大事故災害医療支援の指針(MISSMS)紹介」

西宮市瓦木消防署甲東分署長

グループワーク：大地震発生を想定して

本学は現在学長の指導のもとに中長期計画を立て、教学改革に取り組んでいます。それは、本学が伝統として大切にしてきた高い「英語教育」と「リベラルアーツ教育」の更なる充実を目指す改革で、真に良質の教育を提供しようとする本学の心意気を示すものです。2014年度春から始まる本学の.newカリキュラムの内容について、職員もより深く知る必要があるとして、本研修会で取り上げることになりました。午前の3つの講話を通じて、本学の教学改革の具体像を知り、それぞれの取り組みへの先生方の熱意を実感することができました。

午後には、昨年に引き続き AED の操作や心臓マッサージを復習し、多忙の中をご来学くださった甲東分署長から、大事故や災害発生時の心構えを学びました。残念ながら分署長は公務のために予定を早めて帰られましたが、その後は、グループに分かれ皆で危機を想定して、貴重な話し合いの時を持ちました。

(大学事務長)



講話風景：新たな取り組みへの期待

2013年岡田山祭

大学祭実行委員会 委員長

私たち大学祭実行委員会は「Twinkle」を今年のテーマに、4月から総勢54名で活動して参りました。このテーマには、岡田山祭に参加して下さったすべての方がそれぞれの輝きを最大限発揮してほしい、という願いが込められております。そして、私達はこのテーマを表現するアイコンとして、様々な経験を通していつか人を自然と笑顔にすることが出来るような美しい輝きを与える存在になりたい、という願いを込めて宝石を選びました。

残念ながら当日は、台風の影響でステージや模擬店は中庭ではなく体育館となりましたが、大きな問題なく開催できましたのは、それぞれが各自の役割を果たし、全力で目の前の課題を解決しようと努力したこと、そして何より、顧問の先生方、職員の皆様のご指導、ご協力があったからだと思っております。また、本年度は新企画にも力を入れました。特にファッションショーはいちから企画を立ち上げたので苦労も多かったのですが、当日は満席にすることができ、テーマである「Twinkle」のようなキラキラとした輝きを発信できたのではないかと思います。

委員長としての責任や不安を日々感じて過ごしたこの1年間でしたが、実行委員同士でたくさんの時間を共有し、共に笑い、泣き、励まし、支え合って大学祭を創り上げることができ、本当に幸せに思います。最後になりましたが、大学祭を成功させるために関わって下さったすべての皆様に感謝申し上げます。



実行委員が着用したスタッフパーカーとパンフレット

大学クローバー賞

大学クローバー賞は、神戸女学院大学に在籍する学生の課外活動を奨励することを目的とし、前年度9月から当年度8月までの間に顕著な活動・成績を収めた団体の栄誉を讃えて贈られる賞で、2013年度は9月30日に開催された連絡協議会において、連絡協議会委員および学生自治会委員の投票により選考されました。受賞団体は、学生 YMCA、コーラス部、トランポ・ロビックス部、ラクロス部、フットサル部、バスケットボール部、スカッシュラケット部（順不同）の7団体です。スカッシュラケット部は12年連続で13回目の受賞、コーラス部、ラクロス部は、8年連続で11回目の受賞と、クラブが、連綿と続いている伝承の力を見せつけた受賞となりました。トランポ・ロビックス部は、多くのイベントに積極的に参加し、トランポ・ロビックスの認知度の向上に貢献したことが評価され、バスケットボール部とフットサル部とは、多くの試合に出場し、良い成績を残したことが評価されました。

表彰式は、橋本めぐみ会会長、井上体育部顧問、石川文化部顧問、次期大学学生自治会会長臨席のもと、大学祭初日（10月25日）のオープニングに続いて行われました。今年は、台風の影響で大学祭自体の開催も危ぶまれましたが、会場を初めて第三体育館に移し、小林学生副部長の司会により、松田学生部長から受賞決定の経緯の報告、続いて飯学長より各団体へ表彰状と賞金が授与されました。第三体育館の中は、受賞を称える拍手の音で満ち溢れました。

受賞したクラブは、この受賞を励みとして、また今年度は惜しくも受賞を逃したクラブは、来年度の受賞を目指し、今後もそれぞれの活動を継続させていってくれることを望みます。

（学生生活支援センター）



第12回めぐみ会賞

めぐみ会では、神戸女学院の立学の精神にふさわしい課外活動を行なっている大学生及び中高部生徒の自主的な活動を奨励するため「めぐみ会賞」を設けております。

大学では、10月25日の岡田山祭のオープニングにおいて、めぐみ会賞の表彰式が行われました。今年度は「学生 YMCA」「コーラス部」の2団体に賞が贈られました。「学生 YMCA」はまだ本学では歴史は浅いですが、聖書研究や様々なボランティア活動を企画実行し、学院の立学の精神である「愛神愛隣」にふさわしい活動をされています。一方「コーラス部」は大変歴史のあるクラブです。神戸女学院と音楽教育の歴史は古く、宣教師によって讃美歌や楽器が導入されたことに始まります。今後も神戸女学院スピリットをその歌声とハーモニーで体现されますよう期待しております。また今年の岡田山祭のテーマ「Twinkle」によせて、「全ての人は神様から賜物を戴いています。その賜物を活かして生きる時、人は輝くのです。昼間の星のように、他人からは、それが見えないときもありますが、神様は見てください。皆様、神様から戴いている賜物を活かして、きらきら輝き続けてください。」と橋本恵里子めぐみ会会長がメッセージを送りました。

なお、2012年度中高部受賞団体は「大阪水上隣保館訪問」「修養会長島訪問」でした。2013年度につきましては、1月に選考・表彰いたします。

(公益社団法人神戸女学院教育文化振興

めぐみ会 副会長)



第三体育館での表彰式（学生 YMCA）

<私の研究>

アダプテッド・スポーツのマネジメントを考える

金山 千広



「アダプテッド・スポーツ」とは、個人の身体能力、年齢、障がいの有無などにとらわれず、ルールや用具を工夫して、その人に適合させたスポーツを展開することと理解されています。また、その実践には「公平」「参加」を重視したユニバーサルスポーツ

や、障がいの有無を超えて全ての人を包摂するインクルージョンという発想が必要になります。

例えば、ユニバーサルスポーツ種目としての「風船バレーボール」は、チーム全員が風船に触れてから相手のコートに返球するというルールで行います。この工夫は、全ての人がスポーツに参加する「共生空間」を生み出すためのマネジメントです。

翻^{ひるがえ}って、インクルーシブなスポーツ環境とは、障がいのある人となない人が同じ場所でスポーツを行う取り組みであって、そこでの障がいのある人の参加形態は、参加者としてスポーツの場に居ること、ボランティアなど補助者が付いて活動すること、自立して活動すること等あらゆる段階を含んでいます。この場合のマネジメントは、スポーツに参加する一人一人のニーズに柔軟に対応するような臨機応変さが求められます。

私は昨年度、①学校体育におけるインクルージョン、②インクルーシブな視点をもった指導者の養成、③地域スポーツにおけるインクルージョンという3つの研究を柱として博士学位を取得しました。現在は、スポーツ基本法の施行（2011）を踏まえて、地域の公共スポーツ施設を利用する障がい者によるサービス評価測定を継続研究としています。

アダプテッド・スポーツは実践的な研究領域なので、私自身も障がい者スポーツのボランティアをライフワークとしています。2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催決定は、「する」「みる」「ささえる」というマネジメントの観点から全ての人の生涯スポーツを考える絶好の機会です。ぜひ、障がい者スポーツにも注目してください。

(体育研究室教授)

Artist's Statement

Graham McKelvie



Dance connects us to our bodies through our breath and through sensation. With imagination and effort, we become more than what we were. With insight and empathy, we come to understanding...

My work comes from understanding how the body functions. The body is a wondrous construction full of its own wisdom and my philosophy is to simply listen to it. Movement based on the body's natural workings reveals this wisdom. Doing movement that is organic, which reflects the body's construction, reveals to us the nature of this wonderful thing which we inhabit for our lives.

I incorporate into my teaching, the inescapable elements that we are subject to; gravity, momentum, weight and breath. Dance, therefore, is the study of everything that we are, interacting with the world around us.

Using this as a starting point and as a basis from which self expression can be realized, I try to connect movement with matters of the heart and mind. Human beings are creatures of thought, feeling and imagination and our humanity is reflected in how we move and stand and even in our very breath. Dance requires that we consider ideas that are unusual, curious and provocative, and consider those ideas without judgement. Therefore along with a body that, through training, is strong and supple and resilient, dance requires humor, empathy and imagination. This is what I strive to cultivate...

(音楽学科客員准教授)

<課外活動紹介>

[クラブ]

観世流能楽部

副部長

♪観世流能楽部へようこそ♪

観世流能楽部は、現在3年生1人、2年生3人の計4人で活動をしています。顧問の先生は、文学部総合文化学科教授の小松秀雄先生、師匠は上田貴弘先生です。先輩、後輩関係なくいつも楽しく、時には厳しく部活をしています。

能楽部の活動は、大まかに自分たちの舞や謡という発表の場となり、大きなものは6月と12月、3月の舞台です。特に、神戸女学院大学の能楽部とOGだけで行う12月の自演会が一番の大舞台となります。それらの舞台の発表のために私たちは、お稽古として毎週師匠である上田貴弘先生の元へ行き、稽古をつけてもらいます。加えてこれらの舞台では袴を着るので袴や着物の着付けも習います。

さらに他大学の能楽部の方々との交流も多いです。6月、3月に行う舞台は他大学と合同で行う舞台発表なので他大学との打ち合わせや新入生歓迎会を合同で行うなど交流が深いです。

能楽部と言っても一体どのような活動をしているのかよくわからない、難しそう…、堅苦しそう…と思う方もいらっしゃるかもしれません。実際に入部する前の私もそう感じていました。ですが、入部してみるとそのようなものもなく、部員の持つ雰囲気は堅苦しいという空気がないので敷居が高いなど言うことは決してありません。能楽に興味がなくとも部室を少しだけ覗くだけでも良いので遊びに来てください。



[クラブ] スカッシュラケット部

部長

スカッシュラケット部は、関西唯一のスカッシュラケット“部”として活動している伝統あるクラブです。現在部員は21名で、大阪のスポーツクラブ・ティップネス石橋にて週に3回活動しています。練習は1回につき1時間という短い時間しかできない為、余裕のある部員は西宮北口のコナミスポーツクラブ本店西宮にて他大学のスカッシュサークルの方、社会人の方やOGにご指導いただきながら練習に励んでおります。春と夏には合宿があり、毎年岡山県のマスカットスタジアムにて練習をしています。練習や試合以外にも新歓、他大学との合同イベント、追い出しコンパなどのイベントや、大学の学祭やDKKにも積極的に参加するなど、個人の活動だけでなく部員同士の交流も盛んです。

試合では、練習の成果が実り、賞をいただくこともしばしばあります。先の大会では、4名の部員が今年もインカレ出場を勝ち取りました。様々な大会や学内での活躍も認められ、大学からは毎年大学クロージャー賞をいただいております。このように私たちが活動し続けられますのも、多くの方々にお支えいただいているからです。これからも感謝の気持ちを忘れずに部員一同、日々精進して参りたいと思います。

また、今年スカッシュラケットは五輪新種目の候補に挙がったことで注目されました。今回のことを機に少しでもスカッシュに興味を持っていただけた方は、ぜひ一度体験、見学にいらしてください。心よりお待ちしております。



夏合宿集合写真

中高部報告

高等学部校内大会

2013年度の高等学部校内大会は、1学期期末試験終了後の7月4日(木)に行われました。種目はドッジボール、バレーボール、バスケットボール、卓球、リレーの5種目で、全学年クラス対抗戦で試合が行われます。各クラス、思いが詰まったクラスTシャツに着替え、どの競技も熱戦が繰り広げられました。今年は先輩に全力で挑むS1、S2学年の頑張りが印象的でした。最後は勝者も敗者もお互いを称えあい、涙と感動の思い出に残る一日となりました。

ドッジボール

1位S3A 2位S2B 3位S2A

バレーボール

1位S2C 2位S1B 3位S2A

バスケットボール

1位S3C 2位S2B 3位S2A

卓球

1位S2A 2位S1A 3位S2C

リレー

1位S1B 2位S3C 3位S2A

総合

1位S2A 2位S3C 3位S2C

ブービー賞

S3B

(保健体育科)

中学部校内大会

7月8日(月)中学部校内大会が行われました。グラウンドで開会礼拝後、各クラスの選抜メンバーによるリレーが行われました。どのチームも一生懸命で、バトンパスやスタートの練習を念入りにして、この日を迎えました。応援にも力が入っていて、大いに盛り上がりました。リレーの予選後は、ポートボール、卓球、ドッジボールa・bの3種目に分かれクラス対抗で試合が行われました。開会礼拝の前にリレーの決勝を行い、表彰式では皆が、心身錬磨に励んだお互いを称えあいました。気温も高く、暑い日でしたが1学期の締めくくりとして、充実した一日を過ごすことが出来ました。

総合

1位J2B 2位J3C 3位J3B

ドッジボールa

1位J3C 2位J2B 3位J3B

ドッジボールb

1位J2A 2位J3B 3位J2B

ポートボール

1位J3B 2位J2B 3位J3C

卓球

1位J3A 2位J2C 3位J2B

リレー

1位J3C 2位J2B 3位J3A

(J体育部顧問)

キャリアガイダンス・プログラム

7月8日(月)に実施した本年度第1回中高部キャリアガイダンス・プログラムでは、中高部を卒業後10～15年の卒業生15名を招聘し、生徒たちと交流の場を設けた。その年代の卒業生を招聘したのは、母親ほど年齢が離れていない、社会人として一通りの経験をしている、が理由。社会での活躍の場が多岐に亘るよう、会社員をはじめ、医師、看護師、弁護士などの専門職、研究者を目指す院生、他校の教員、独立起業した建築士、もうすぐ主婦になるという方などに集まっていた。

最初に、全校生を集めてのパネルディスカッションを行った。MCも含め7名の卒業生がパネリストとして登壇し、自己紹介の後、現在の自分と中高部時代に得たことがどのように繋がっているかについていくつかのテーマに関して討議していただいた。

加えて、高校生には学年別のプログラムを提供。1年生は、学年全体で4名の卒業生を囲みQ&Aのセッションを持った。2、3年生は、類似の職種の卒業生がペアを組み、6つの教室に分かれて待機。生徒は自分が関心のあるペアの部屋へ行き、話を聞き、質疑応答するという企画だった。

生徒たちからは、このような機会がないと繋がることのできない先輩たちと出会え、多くを学べてよかったという感想を得た。また、卒業生からは、この機会に中高部で得たものが今の自分に深く根付いていることを再認識できたという声が寄せられた。

(教務課キャリアガイダンス係)

夏の修養会 釜ヶ崎訪問

高等学部 3年生

6月15日に、釜ヶ崎を訪問しました。今回の訪問で2つのことが特に印象に残りました。1つ目は、私にはほんの少しの物でも無駄にしないようにする心がけが足りていなかったということです。おにぎりを握り始める時に、塩が手からこぼれるのを防ぐために手のひらの上で広げるように食堂の方から注意されました。また、ご飯を炊いた鍋に米粒が残らないようしゃもじでこそげ落とすことや、スプーンの具の野菜を全て使うことに懸命な食堂の方や友人たちの姿を目にして、普段の自分の態度を反省しました。

2つ目は、釜ヶ崎の人たちは私の身の回りの大人と変わらないということです。炊き出しの時に食べ物を渡すと「ありがとう」と言ってくださったり、帰り際に食堂の前で集合写真を撮っていると声をかけてくださったりして、優しいと感じました。けれども同時に私は釜ヶ崎の人たちに対して根柢なく負の印象を持っていたことにも気づきました。しかし、ホームレスの人を街で見ると今でもびっくりしてしまいます。なぜこれまで私は偏見を持っていた、それが今も完全には消えていないのか考えましたが結論は出ていません。

今回の訪問で得たこと考えたことはたくさんありますが、私はほとんど釜ヶ崎の人たちの力にはなれていません。しかし、今私にできることは、この経験や今回出会ったような人々の存在を心に留めて生きていき、将来社会を動かす一員となった時に生かすことだと考えています。

夏の修養会 長島訪問に参加して

高等学部 2年生

今回私たちは長島愛生園、邑久光明園を2日間にかけて訪問させていただきました。長島愛生園に到着して私が一番に思ったことは、“想像とちがう”でした。私はそこでハンセン病の患者が隔離されていたという過去から、愛生園自体を暗い場所だと勝手に考えていました。また、入居者訪問の直前は入居者の方とどのように接すればよいのか分からず、緊張でがちがちになっていました。しかし、実際の愛生園はとても自然が豊かで空気の澄んだ美しい場所でした。そして、入居者の方が今の趣味をとても楽しそうに語って下さる姿は、私たちの回りの年配の方と全く変わりありませんでした。私はこの自分の思い込みこそハンセン病に対する差別を生み出した偏見なのだと気づき、自分の浅はかさに恥ずかしくなると共に恐ろしくなりました。私は自分では偏見など持っていないつもりでした。らい予防法が廃止されてもおハンセン病の人々に対する態度が変わらなかったこと、これは正しく理解しようとしなかった、何が正しいのかを見極められなかった私たちに問題があります。同じ過ちを繰り返さず新しい差別や偏見を作らないために、たくさんことを学び、社会に広く目を向けていくことが私たちの義務であり、また、私たちが今できる小さいながら最大限のことだと感じました。この訪問に携わってくださった全ての方に感謝します。

夏の修養会 広島訪問

8月1日、2日の日程で夏の修養会広島訪問を実施いたしました。

1日目は広島女学院を訪問し、核兵器廃絶のための署名実行委員の皆さんとの交流・学びの時を守りました。例年、両校のプレゼンテーションを通して、違った視点で平和について考え、話し合うことをしてまいりましたが、今回もよい学びの時が与えられました。

本校の生徒たちによる「無関心と無関係」をテーマとした2つのプレゼンテーションはどちらも力作でした。広島女学院からはクイズ形式の平和学習と、署名実行委員会の活動の紹介などがありました。その後、活発な議論を交わし、「自分たちには何ができるのだろう」という課題をいただいてこの会は終了しました。その後、広島平和記念資料館の見学をし、被爆者の証言をお聞きし、語らいの時を守りました。

2日目に予定していた街頭署名と慰霊碑巡りは雷のために中止となりましたが、近隣の施設や特別展示を回り、有意義に過ごすことができました。

今回も「ヒロシマ」を背負い、この時代における自分たちの使命を果たそうとする広島女学院の生徒たちの姿に、参加者一同が心を揺さぶられる思いを抱きました。

毎年、広島訪問では考えさせられる言葉が与えられますが、今年は「無関係は無関心の産物です」という言葉が与えられました。貴重な機会を得た者として、知ろうとすること、聞こうとすることを大切にしていきたいと願っています。(参加生徒31名、引率教員3名)

(聖書科)

リーダーシップトレーニングキャンプ

中高部の夏休み恒例行事であるリーダーシップトレーニングキャンプを、今年は7月18日(木)～20日(土)の日程で実施しました。参加生徒の意気込みは、多数の応募者の中から抽選を突破しただけあって素晴らしく、このキャンプに向けて、皆で4月から毎週会議を重ね、生徒主体で企画や段取りなど十分な準備を行ってきました。

今年の目玉企画は、無地の旗に即興で絵を描くという「旗作り」でした。その場で与えられた「夏」というテーマに基づいて、皆で意見を出し合い、上級生のリードもあって、またたく間に意見がまとまっていきました。そして、描く作業に移るやいなや、見事なチームワークで、華やかな旗をみるみる仕上げていきました。このような生徒の姿を目の当たりにする度に、生徒一人一人が持つ、はかり知れない可能性を感じることができて、教員としては非常に嬉しくなります。

今年は「丹波少年自然の家」という初めて使用する施設でのキャンプでしたので、生徒・教員共々戸惑うことも多かったのですが、各人が自分の役割を見出すことで、柔軟に対応し、またひとつ成長することができたのではないかと思います。

2泊3日を通して、天候にも恵まれ、予定を変更することなく過ごすことができました。また、怪我人・体調不良者が一人も出ず、全行程を無事に終えられたことが何よりありがたいことでした。

(キャンプディレクター)

夏山登山

今年の夏山登山は、八ヶ岳(南部)に登りました。参加者は、生徒45名(J2～S2)、教員9名の54名に現地ガイドと添乗員1名の総勢56名の大パーティーとなりました。

1日目は茅野市の渋御殿湯で1泊しました。

2日目、朝は大雨だったので、宿で暫く待機した後、登山口を稲子湯に変更し、バス移動しておにぎり食べてから登山開始しました。木が生い茂る中を歩き、予定通りの時間に本沢温泉に到着しました。日本一高所の野天風呂で足湯をする生徒もいました。

3日目は高度感のある岩場のコースで、鎖や梯子が数か所ありましたが、生徒たちは身軽に、声を掛け合いながら進んでいき、硫黄岳、横岳を経て赤岳に到着しました。急な岩場を這い上がった後の頂上の景色は圧巻で、各学年で写真撮影をしました。夜は綺麗な星空を眺めることができました。

最終日、早くから目覚めて防寒具を着込み、御来光と雲海を堪能しました。360度見渡す限りの山々が広がっていました。横岳まで来た道を帰り、尾根を歩いて、清里に下山しました。昼食・入浴後、帰路につき、21:00過ぎに西宮北口で解散しました。

予定通りに運ばないことが多々ありましたが、生徒たちは夏山の厳しさ・すばらしさに直面し、また周囲のことを考えて行動することで、一回りも二回りも成長して帰って来られたのではないのでしょうか。伝統ある夏山登山がこれからも様々な方のご協力のもと、安全に実行していけるようお願いしています。

(夏山登山ディレクター)

夏季訪米語学研修旅行報告

創立100周年記念行事の一環としてはじまった、KCC-JEEのお世話によるホームステイを中心とした夏季訪米研修旅行は、残念ながら諸般の事情により、2007年を最後に途絶えておりました。この度、中高部では、長年ホームステイさせていただいたゆかりのあるミネソタの地で、現地のセントクロイ高校が開催する、海外学生対象語学研修プログラムに初めて生徒を送ることになりました。加えて、幸いなことに、特別に神戸女学院生のための週末ホームステイプログラムも、KCC-JEEを通じて、ミネソタ在住の石田理事のご尽力により、組み入れることができました。

セントクロイ高校とその研修プログラムの概要につきましては、石田理事がKCCだよりに書いてくださっておりますので、そちらをご参照ください。

訪米語学研修旅行団は、7月12日金曜日に関西空港を発ち、シアトルで乗り継ぎをするついでに、2泊して、市内を観光しました。好天に恵まれ、ワシントン大学や、パイクプレイスマーケット、ボーイング社見学などを通して、生徒たちは、少しずつ英語にも慣れ、楽しい時を過ごしました。

7月14日曜日の夕方、ミネアポリス空港で石田理事に出迎えていただき、期待と少しばかりの不安の中、3週間の研修が始まりました。様々な国から参加した生徒たち、担当の教員やスタッフ、午後の行事にグループリーダーとして参加したアメリカ人高校生たちと、英語でなんとか意思疎通をはかる日々です。カフェテリアでの食事時も、神戸女学院生だけで固まらないよう申し合わせ、みな積極的に努力していました。

一日は、神戸女学院と同じく、毎朝 devotion（礼拝）からはじまり、日本では知られていない讃美歌も教えていただきました。語学の授業は最初のクラスわけテストで決まった15人程度のクラスで受けました。特に英語による、数学、理科、社会などは、新しい体験だったと思います。午後の見学や活動は、どれも興味深く、ミネソタへの理解と関心を深めるものでしたが、中でも、地域のニカラグア食糧支援ボランティア活動の一端を体験させていただいたことが印象に残りました。

生徒たちが異口同音にすばらしかったというのは、週末のホームステイ体験です。12のご家庭で、それぞれ異なってはいても心のこもったおもてなしをうけ、みな感激覚めやらぬ表情で、日曜日に学校へもどってきました。アメリカの家庭生活の一端を体験し、学校以上に英語を使わざるを得ない環境におかれ、自分たちも日本のことを伝える喜びを感じたようです。うれしかったことは、ホストファミリーの皆様もこの機会を喜んで、わざわざプログラム最後のタレントショーに来てくださったり、温かいお言葉をメールで送ってくださったことです。このような交わりから、国際理解の第一歩が始まるのだと実感しました。週末ホームステイ実現にご尽力くださった石田理事はじめ KCC-JEE のご支援を心から感謝いたします。

プログラム最後には、講堂に集まって、各クラスごとの成果発表があり、それぞれ担当の先生から終了証書を一人ずつ手渡していただきました。最終日には参加者やスタッフと名残を惜しみつつお別れし、8月4日無事帰国しました。

3週間の長い間には、忙しいスケジュールや思いがけぬ低い気温に、体調をくずしたり、食べ物があわなかったり、他国の生徒との文化的な摩擦があったりと、問題もありましたが、直後のアンケートによれば、みな参加したことに満足しているようです。この体験が、生徒たちの中で熟成され、やがて大きな実りをもたらしてくれるに違いないと確信しています。セントクロイ高校の教職員の方々をはじめお世話になったすべての皆様に篤く御礼申し上げます。

(中高部英語科)

中高部 教職員研修会

9月2日(月)に中高部教職員研修会が行われました。

午前9時にコムセンター1階に集合し、聖書科教諭の奨励による開会礼拝によって研修会が始まりました。

中高部長より中高部の使命(ミッション)と方針(ポリシー)を中高部関係者(ステークホルダー)に対してどう説明するのか、教員内で共通理解を深めていただきたいとの挨拶をいただき、今年度の研修会は「神戸女学院中高部についての共通認識のために」というテーマを持って行われました。

また、今年度は教員と職員で分かれて話し合いをもつことになりました。職員は中高部長挨拶のあと退室し、ストレステストのときに合流しました。

○「キャリアガイダンス」(9:20~9:50)

「教育目標」の確認から始まり、新しいキャリアガイダンスの形を作るためのグランド・デザイン策定作業の進捗状況の報告、そして今後の展望と課題について発表がありました。

今年度1学期末に実施したキャリアガイダンス(社会で活躍されている卒業生による「社会に出て役立った神戸女学院で培ったこと」を講堂で全校生徒にお話した企画)は好評であったことを確認しました。

○(発題)「神戸女学院中高部についての共通認識のために」(10:00~10:25)

校務運営委員会で作成した次の2つの資料(A、B)について教員間で討議して欲しいとの発題がありました。

A「神戸女学院中学部・高等学部は、こんな学校です」

B「今後検討すべき課題についての意見討論」

○分団での話し合い(10:30~12:00)

教員がA班~D班の四班に分かれ、Aの資料が中高部に関わる外部の方への説明内容資料としてふさわしいか吟味し、Bの資料について自由討論することになりました。

また職員はE班として別に「事務室・図書室サイトの新設による保護者へのサービスの向上について他」という題で話し合いが行われました。

○昼食会(12:00~12:40)

○夏休み中の行事報告(12:50~13:30)

夏休みに行われた各行事について、責任者より報告がありました。

[リーダーシップトレーニングキャンプ]

[長島愛生園訪問]

[広島訪問]

[夏山登山]

[訪豪研修旅行]

○分団報告(13:45~15:15)

まずAの資料について説明に書かれてある語句、文章について話し合った内容について各班より発表されました。

その後、Bの資料である今後検討すべき課題について、時間ぎりぎりまで討論が行われました。(ただし各教科で討議する必要のある内容はのぞく)

○ストレステスト(15:30~15:45)

健康診断では現在行われていないストレステストの紹介があり、希望者のみに実施されることになりました。

2013年度の中高部教職員研修会は以上のような内容で行われ、閉会礼拝をもって16時に終了しました。

退職されていく教員、そして新しく奉職される教員と、人材が入れ替わっていくなかで、中高部の変わらない教育目標と変わっていかねばいけない内容を皆で確認できて大変有意義な時間だったと思います。

またAの資料は今回の話し合いによる修正後に、年に数回行わる外部への説明会等で使用されることになります。なお、取り上げられた発題や提案については、今後も引き続き検討していくことになっています。

(校務課 研修会係)

文化祭

9月20日、21日に中高部文化祭が催されました。二日とも天候に恵まれ、スムーズにプログラムが進行しました。

今年の文化祭のテーマは『煌（きらめき）』が選ばれました。このテーマは文化祭が煌めき輝くようなひとときとなりますようにと願ったものです。

中高部1号館に入ると、煌めく星たちの出迎えがあり、アンジー・クルー記念館に入ると、煌めく火花が出迎えてくれるなど、校舎に入った途端煌めきの世界に引き込まれる装飾は圧巻でした。

各教室では、煌めく星と魔女の世界、異国の煌、ほしがほしー、PIKALISA……と題する展示が行われました。

講堂では恒例となったクラシックコンサートや演劇、ダンス、コーラスの公演があり日頃の練習の成果が発揮されました。

今年の文化祭では、いろいろな新たな企画が生まれました。例えば、「煌めけ！ワードラリー！」というスタンプラリーが、校内用文化祭で行われました。結果、多くの生徒が参加し、教室展示がさらに活気づいていました。また、校外用文化祭では、「煌めけ！シャイニングスター！」という企画が、グラウンドで催されました。それにより、新たな文化祭の会場が加わり文化祭に広がり生まれるきっかけができました。

S役員会からの企画として、話しやすいスタイルでの神戸女学院についての討論会が催されました。それは、かつて中高部の文化祭期間にあった自治会DAYという神戸女学院についての討論会を思い起こす企画でもありました。

今年の文化祭企画実行委員会は、目的を持って企画を考えそして実行するというその名の通りの仕事をしっかりとしてくれました。

そして何よりも、生徒のみなさんが楽しい文化祭にしようという気持ちで一つにまとまっていたことが今年の文化祭の特徴でした。

そんな今年の文化祭は、キラキラ煌めいた思い出として、みんなの心の中に残っていることでしょう。

（文化祭企画実行委員会顧問）

MLC 訪日旅行団受け入れ報告

西オーストラリア州の姉妹校 Methodist Ladies' College の訪日旅行団受け入れは、6年ぶりとなります。日本語を学ぶ14～16歳の女生徒14名と、2名の引率教員は、9月22日に来日、24日の紹介礼拝では、先生と生徒の日本語スピーチと、スライドがありました。その後の2週間は、4回の京都、奈良などへの日帰り遠足のほか、学校で特別授業やホストシスターの授業に参加したりして過ごしました。

特別授業は、音楽（和太鼓演奏）、書道、調理実習（たこ焼きなど）美術（和手ぬぐいデザイン）、日本語、体育、広島平和学習、中学3年の英語授業参加などで、放課後は、華道部や、報徳学園で武道のクラブ活動を見学しました。ご協力いただいた皆様方に感謝します。

今回は、前半と後半あわせて32のご家庭にホストをしていただきました。皆様快くお世話くださり、10月4日のさよならパーティでは、名残を惜しんで写真をとりあう姿がみられました。本当に有難うございました。

ホストシスター以外の生徒たちも、控え室に話にきたり、直前の文化祭で発表した演奏を披露したり、昨年度訪豪旅行参加者が歓迎会をするなど、積極的に交流しようという姿勢が見られ、うれしく思いました。

一行は、10月6日に広島へ旅立ち、その後無事帰国されました。今後も末長く、両校の交流が続いていきますことを心から願っております。

（中高部訪日旅行団受け入れ委員会）

J1 秋の遠足

10月18日(金)徳島県鳴門市の大鳴門橋遊歩道「渦の道」と大塚国際美術館に行きました。7:45に西宮北口に集合し、バスで、始めに「渦の道」にむかいました。「渦の道」は、大鳴門海峡大橋の真下にある遊歩道で、ガラス床から海面を覗き込むことができます。集合時は、今年一番の寒さでしたが、「渦の道」についた頃には少し暖くなり、気持ちの良い海上散歩を楽しみました。その後食堂で礼拝後、海産物やサツマイモなど特産物の昼食を味わい、原寸大で陶板に焼き付けた名画約1,000点が展示されている大塚国際美術館に行きました。最初にクラスごとに学芸員の説明を聞きながら、システーマ礼拝堂のミケランジェロ作旧約聖書物語による天井画、最後の審判を描いた壁画、サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ修道院のダ・ヴィンチ作「最後の晚餐」(修復前後の作品が対面式に展示されています。)などを中心に約一時間鑑賞した後は、班別自由行動。事前学習で調べた絵画をじっくり鑑賞したり、館内の案内ロボット「アートくん」に自分に似ている肖像画を診断してもらったり、ミュージアム・ショップで買い物を楽しんだりと思い思いに過ごしました。その後、淡路ハイウェイ・オアシスで休憩後西宮北口に17:45到着、解散。往復とも交通渋滞で時間帯を変更しましたが、生徒たちは指示をよく守り楽しい一日となりました。出席140名欠席1名。引率教員は7名。

(J1A担任)

J2 秋の遠足

10月18日(金)、J2生徒139名(欠席2名)と引率教員3名と担任団と添乗員1名で、奈良へ秋の遠足に行きました。8時30分に西宮北口を出発し、各クラスのバス内でのレクリエーションを楽しみながら、1時間半ほどで最初の目的地である法隆寺に到着しました。クラス写真の撮影後、引率の先生お手製のガイドブックを手に、班ごとに散策を行いました。細かな解説を読みながら、法隆寺の歴史や建物をじっくりと味わいました。「WANTED」という形式で、法隆寺で見られる仏像や所蔵物を探しながら熱心に回る班も多く、広い境内を歩き回りました。その後バスで移動し昼食に向かい、昼食の終わった班から自由散策へ向かいました。東大寺へ行くグループとならまちを散策するグループの大きく二方向に分かれました。大仏を見た班、鹿を探しに行った班、レンタサイクルをしてあちこちを回った班、ならまちで、昔ながらの風情ある町並みを楽しみながらお土産を買ったり、おやつを食べたりした班など、思い思いにすごし、友人たちとの交流を深めました。4時に再集合し、予定より少し遅れて5時40分に西宮北口にて解散となりました。

探究の授業の一環として、それぞれが学びながら楽しく有意義に秋の一日を過ごすことができました。友人の新たな一面を知り、絆もさらに深まったようで、思い出深い秋の一日になったと思います。

(J2A担任)

J3秋の小旅行

10月16日(水)から18日(金)まで生徒133名(欠席1名)と教員6名は、北陸・飛騨方面への小旅行を楽しみました。

16日(水)は8時20分に西宮北口を出発し、昼過ぎに石川県伝統工芸村「ゆのくにの森」に到着。昼食後、沈金、蒔絵、紙すき、金箔細工、友禅型染、九谷焼の絵付けなど、加賀の伝統工芸体験を楽しみました。夕方、辰口温泉の宿に到着。総合学習「探究」の一環として、金沢のお菓子をテーマに「金沢の歴史と文化について」と題した講演を聞き、レポートにまとめました。

17日(木)は朝食後金沢市内へ。兼六園でクラス写真撮影後、妙立寺へ78名、金沢商業高校ツーリズムコースの生徒による兼六園ツアーに55名が参加。その後は班ごとに自由研修を楽しみました。近江町市場で「食欲の秋」を楽しむ班あり、21世紀美術館で「芸術の秋」を楽しむ班あり。午後は世界文化遺産の白川郷へ。合掌造集落を班ごとに見学しました。夕方、高山に到着。テーブルマナー講習を受けながらフランス料理をいただいた後は「さるぼぼおばさん」からさるぼぼ作りを学びました。

18日(金)の午前中は班ごとに高山市内を見学。高山陣屋を見学したり、古い町並や朝市で買い物したり、高山ラーメンやみたらし団子を賞味したり。昼過ぎに高山を出発し、5時半に西宮北口で解散。

台風の影響が心配されましたが、天候にも恵まれ、楽しい経験と時間を共有して友達の輪を広げ、友情を深められた旅となりました。

(J3A担任)

S1一泊研修 (近江八幡)

S1生徒139名(引率教員6名)は、10月17日(木)～18日(金)の一泊二日で近江八幡方面へ一泊研修に行きました。この研修の主な目的は、生徒たちにじっくりと自分の将来などについて話し合いをしてもらうことにあります。生徒たちは7人の班に分かれてまず「2020年の私」というテーマで話し合い、その後また別の7人の班に分かれて「なりたい自分」というテーマで話し合いました。どのグループでも、時には真剣に、時にはユーモアを交えて活発に話し合いができていたようです。この話し合いで自分の将来像を考えたり、他の人の夢に触れて刺激を受けたりしたことが、どのような経路を辿って自己実現していくか、そのために今どのような「学び」が必要か、ということを考える上で役立つことと思います。S1は一泊研修から帰ると来年度の選択科目を考えますので、その際にも参考になることでしょう。

また、真剣な話し合いの後にはレクリエーションも行いました。生徒たち有志による企画で、引率教員もまじえて楽しい時間を持つことができました。こういう時に垣間見られる生徒たちの多芸・多才さには、毎回驚かされます。

この他にも、17日の往路では彦根城、18日の復路では近江八幡市街と琵琶湖博物館を見学しました。事前にロングホームルームで予習をしていたこともあり、短時間ながら充実した見学ができました。

(S1A担任)

S2 修学旅行

10月14日(月)～18日(金)の日程で、九州を訪れました。生徒141名と留学生1名、欠席者はありませんでした。3日目の朝のみ台風の影響がありました、結果的に全日晴天に恵まれました。1日目太宰府天満宮散策、2日目平戸島散策と長崎・浦上天主堂での平和学習、3日目長崎市内その他を班別で自主研修、4日目阿蘇山観光、5日目柳川・川下りが主な内容です。

修学旅行委員さんたちが早期から様々な分野でそれぞれにしっかりと準備をしてくれたこと、また生徒のみなさんがよく規律を守ったことが相まって、すべてが至って順調でした。4日目の夜には、ダンスあり歌ありゲームありのレクリエーションのひと時を楽しく過ごし、思い出が一層深くそれぞれの心に刻まれたことでしょう。

引率教員は、6名でした。加えて、看護師1名、添乗員3名の陣容でした。

(S2 学年主任)

S3 秋の遠足

去る10月18日、S3最後の校外行事である秋の遠足に出かけました。当日は天候にも恵まれ、8時半にはS3全員(欠席者なし!)が西宮北口に集合、いざ京都宇治に向けて出発となりました。

道中のバスはそれぞれに日頃の憂さ?を忘れ、賑やかに過ごしましたが、楽しい時間は瞬間に過ぎ、9時40分には宇治に到着、まずは源氏物語ミュージアムを訪れました。ここでは「浮舟」の、なかなかおどろおどろしい映像を鑑賞した後に館内を見学、平安貴族文化の雅やかでありながらどこかもの哀しい雰囲気に触れました。

その後はいよいよ昼食場所である萬福寺へ。なぜかハロウィンの装飾がなされた寺を横目に通り過ぎ、こちらはあくまで由緒正しい萬福寺を拝観、中国文化を融合した斬新さと禅宗特有の厳かさを実感するひとときでした。そして11時40分に、待ちに待った普茶料理をいただきに向かいの「白雲庵」へ。普茶料理はさすがに上品で、朝からの空腹を満たしきれなかった人もいたようですが、普段は減多に口にする事のない中国風精進料理をいただきつつ、ここで修行した人たちに思いを馳せるよい機会が持てたように思います。

13時10分に宇治を出発、14時から14時半にかけて、JR京都駅と平安神宮前にて三々五々解散しました。なお、引率教員は、7名でした。無事に開催できたことに心より感謝いたします。

(S3B担任)

校内読書感想文コンクールについて

今年も夏休み中、J2とS2は宿題で、その他の学年は自由参加で読書感想文コンクールをおこなった。先生方から提出された優秀作を、図書委員の先生方が審査して、以下のように入選者を決定した。11月5日(火)の礼拝時に、表彰式がおこなわれた。

個人情報保護のため、一部削除しています。

個人情報保護のため、
一部削除しています。

中学部キャンパス見学会

11月16日(土)に中学部キャンパス見学会を開催致しました。主な内容は、入試説明会、模擬授業、礼拝体験、生徒によるクラブ活動紹介、作品展示、行事報告、英語スピーチ・暗誦、キャンパス・ツアーです。午前中に講堂で行った入試説明会は10月1日(火)と同じ内容でしたが、今回は引き続き在校生と卒業生各一名による学校生活における体験談を聞いていただきました。模擬授業は、英語、体育、理科、音楽を教科によっては、抽選で選ばれた方のみを受講していただきました。生徒活動の紹介としては、運動系クラブを中心とする公開練習の他、文化系クラブによる劇、コンサート等の発表、来校者の方々と交えての作品制作を行いました。また、作品展示として、美術、書道、家庭科、情報の授業で制作した作品、J1 英語の夏休みの宿題、探究(1年かけて行う個人研究)レポートなどの閲覧コーナーも設けました。自治会役員の生徒が中心に行うキャンパス・ツアーは、今回も大人気でした。これらの活動の他、たくさんの中学部在校生が受付等を担当し、来校者の方々にに対し丁寧に対応していました。受験生の保護者の方々が、入試説明会に参加しておられる間に、祖父母の方々と低学年、就学前のお子さんが校内のイベントを楽しんでおられる微笑ましい姿も多く見られました。好天に恵まれ、来校者は1064人でした。

(校務課広報係)

芸術鑑賞会

2013年度の芸術鑑賞会として、11月18日、アミティホールにて、神戸女学院大学音楽学部を卒業され、現在各方面で活躍されている皆さんによるジョイント・リサイタルを開催しました。演奏していた方々と主な演目は次の通りです。

寺澤 彩（ハープ）

アッセルマン 〈泉〉

フォーレ 〈即興曲 作品86〉 他

樋口 藍（フルート）

伴奏 別所ユウキ（ピアノ）

グルック 〈精霊の踊り〉

プーランク 〈フルートソナタ〉 他

山田愛子（メゾ・ソプラノ）

伴奏 蛭川千佳（ピアノ）

ドヴォルジャーク 〈わが母の教えたまいし歌〉

リスト 〈愛の夢〉 他

別所ユウキ（ピアノ）

ラフマニノフ 〈10の前奏曲 作品23-4 ニ長調〉

ラヴェル 〈ラ・ヴァルス〉 他

バラエティに富んだ楽曲を、それぞれに趣向を凝らし、迫力ある演奏で披露していただきました。日頃はクラシック音楽を聴きにくい機会の少ない生徒たちも、イメージ豊かに、それぞれの楽器の音色に耳を傾けていました。まさに、「芸術の秋」を意識して過ごした一日でした。

次年度の芸術鑑賞会は演劇です。

（視聴覚委員会）

秋の子ども会

11月23日、さわやかな秋晴れの中、秋の子ども会が開催されました。当日は、20余名のグループリーダー（GL）と高等学部の新旧役員会のメンバーが、神戸真生塾の子どもたち10名の来校を今や遅しと待つこと一時間余り、朝10時前に、真生塾の先生方や本校のスタッフに連れられた元気な子どもたちと会うことができました。

最初に短い礼拝の時を持ち、今回の実行委員長による開会宣言がなされた後、まずはクロスワードパズルを解きに教室の外へ。その後は被服室にて「でんでんだいこ」の制作に取りかかりました。作品にはそれぞれに工夫を凝らし、

個性溢れるでんでんだいこができ上がりました。

お昼は、役員会の新メンバーが腕によりをかけたハヤシライスとポテトサラダが試食室にて振るまわれました。その美味しさにお代わりする人が続出、調理したメンバーは嬉しい悲鳴をあげることとなりました。

午後は、グラウンドで大縄跳びをしたり野球をしたりと思い思いに楽しい時を過ごしました。午後2時半に、役員会メンバー手作りのババロアをいただいた後、子どもたちは、多くのお土産を抱えて満足そうに帰って行きました。

今回の秋の子ども会を成功に導いてくださったすべての方々に心より感謝申し上げ、「報告」とさせていただきます。

（高等学部役員会顧問）

卒業生シリーズ

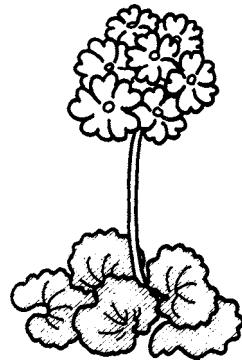
10月29日と30日の中高部礼拝は「卒業生シリーズ」として、卒業生を講師としてお招きしました。

29日は125回の卒業生から、「大学に行って気づいた3つのこと」というテーマでお話いただきました。1つ目として挙げられたのは、自分の価値観が全てではないということです。大学では全く違う環境で暮らしてきた者との出会いがあります。その中で自分の価値観を絶対視したり、卑下したりしないで、お互いの考えを理解し合うことが大切なのだと話してくださいました。2つ目は神戸女学院の卒業生はよく中高部時代の話をするということです。その理由として、単に楽しかったからということではなく、苦しい事も楽しい事も経験できたからではないかと話してくださいました。3つ目は選べる道は自分で選ぼうということです。人生には決断すべき場面がありますが、その時に、自分で判断し、決断する力を持ちましょうと話してくださいました。「勉強を理由にして行事を諦めなくなかったし、他の人にも諦めて欲しくない」という思いで、文化祭企画実行委員会などの行事と勉強を両立させようとしたという言葉が印象的でした。

30日は126回の卒業生から、「チャンス」というテーマでお話いただきました。タンザニアでのボランティアの経験を通して、「どれだけ頑張ってもチャンスが巡ってこない境遇があるということを知り、私たちはチャンスに恵まれていることに気づかされた」と話してくださいました。最後に「与えられたチャンスは掴みとってください。なぜなら、それは誰にでも与えられるものではないからです。そして、チャンスを掴んだ人は他者のために生きることを考えてください」「昇れるところまで昇りつめて、そこから引き揚げるような人になってください」と話してくださいました。広い視野で世界を見つめながら使命というものを考えておられる姿が頼もしく映りました。様々なチャンスに恵まれているが、それを生かすことよりも現状に不平をこぼしがちな私たちの姿を思い知る機会となりました。

卒業生の言葉から学院で学ぶことの意義や喜びについて改めて確かめる機会が与えられ、感謝しています。

(中高部チャプレン)



<課外活動紹介>

[クラブ]

J卓球部

部 長

GO! KC! GO!

私たちJ卓球部は、火・木・金・土曜日の週4日、活動しています。

「ファイト」という掛け声に合わせてランニングをしてから、基本練習、実践練習をします。

今年度は、西宮市の大会において個人戦2部で優勝・準優勝、また団体戦上級の部と、個人戦で2名が阪神大会に出場しました。

今は「西宮市の大会において団体戦で優勝する」ことを目標に、時には厳しく、また励まし合いながら練習しています。

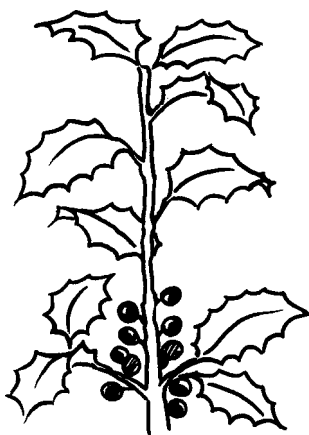
これからも友情を深めながら、目標に向かってがんばりますので、応援よろしくお願いします!

[クラブ]

J演劇研究部

部 長

J演劇研究部では、5月のJ1歓迎会、9月の文化祭、12月のもみの木の集いの年3度の公演に向けての練習に最も力を入れています。限られた練習時間と格闘しながら、より良い舞台にするために日々、練習に励んでいます。1つの劇を作り上げることは苦勞も多いですが、その分やりがいもあり、部員全員が充実したクラブ生活を送っています。舞台を完成させるという共通の目標を持つことによって生まれる団結力が私たちクラブの大きな魅力と言えるでしょう。



[クラブ] Sバレーボール部

部 長

私たちSバレーボール部はS2が2名、S1が3名、そして夏休みからはJ3が6名加わり、部員同士でたくさんコミュニケーションをとりながら、練習しています。

普段からJS合同で練習に取り組み、互いに高めあえる充実した日々を送っています。

Sは9月の秋季リーグ戦でチーム一丸となって戦い、6部に昇格することができました。春季リーグ戦でも良い結果が残せるよう、新メンバーで頑張っていきますので、応援よろしくお願いします！

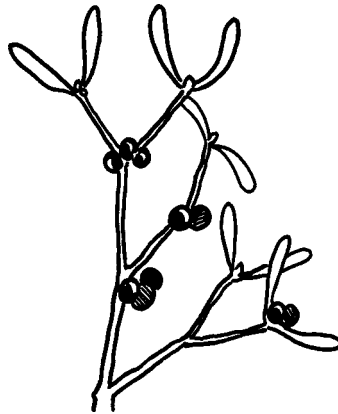
[クラブ] S茶道同好会

部 長

私達S茶道同好会は、1ヶ月に2～4回松風庵で活動しています。活動日数は少ないですが、神戸女学院の大先輩である先生方にご指導いただき、毎回とても充実しています。次々と興味深いことを教えていただき、上達していくのが楽しいです。

先日の中高部自治会主催の文化祭では、茶会を開き、部員が盆略点前をして日頃の稽古の成果を披露いたしました。大変盛況で嬉しかったです。

今後ともS茶道同好会をよろしくお願いいたします。



〈学 院 日 誌〉

8月3日(土)・4日(日)	大学オープンキャンパス	11月8日(金)・9日(土)	音楽学部公募制推薦入学試験
9月10日(火)	中高部教員会議	11月9日(土)	文学部・人間科学部公募制推薦入学試験、クローバー推薦入学試験
9月16日(月・祝)	大学オープンキャンパス	11月11月(月)～15日(金)	宗教強調週間
9月20日(金)(校内用)・21日(土)(校外用)	中高部文化祭	11月6日(水)	中学部教員会議
9月25日(水)	理事会 中高部教員会議	11月15日(金)	教授会
10月1日(火)	中学部入試説明会	11月16日(土)	中高部キャンパス見学会
10月5日(土)	AO入学試験	11月20日(水)	中高部教員会議
10月9日(水)	中高部教員会議	11月23日(土・祝)	大学オープンキャンパス
10月12日(土)	岡田山キャンパス移転80周年記念 (創立記念日) 行事	11月27日(水)	理事会 臨時評議員会 臨時理事会
10月14日(月)～18日(金)	高等学部修学旅行	12月4日(水)	中高部教員会議
10月16日(水)～18日(金)	中学部小旅行	12月13日(金)	大学オープンキャンパス
10月18日(金)	教授会	12月18日(水)	理事会
10月23日(水)	理事会 中高部教員会議	12月19日(木)	中高部教員会議
10月25日(金)・26日(土)	大学祭	12月20日(金)	教授会 学院クリスマス礼拝

目

W. M. ヴォーリズのメッセージと神戸女学院	1
神戸女学院岡田山キャンパス移転80周年記念シンポジウム報告	3
神戸女学院第5代院長デフォレスト先生召天40周年記念行事報告	4
神戸女学院家庭会報告	5
初夏の公開講座報告	6
学院リトリート報告	7
2013年度 宗教強調週間	8
KCC だより	10
史料室の窓・キャンパス探訪(3)	12
留学報告	13
人事・慶弔・栄誉・永年在職者表彰・記念賞	14
その他の新刊一覧	14
新刊紹介	15
オフィスの宝物	16
大学報告	
共通英語教育の教育方針について	17
子どものための七夕コンサート	18
企業訪問 ～企業との関係づくり～	18
第4回絵本翻訳コンクール	19
「地域からESDを推進する女性環境リーダー」シンポジウム	19
留学生紹介	20
受入れ留学生報告	20
派遣留学報告	21
語学研修報告	22
音楽学部夏期講習会報告	24
保護者懇談会報告	25
夏期インターンシップ実施報告	25
海外インターンシップを終えて	26
インターンシップ参加報告	26
2013年度大学職員SD研修会	27
2013年岡田山祭	28

次

大学クローバー賞	28
第12回めぐみ会賞	29
私の研究	30
課外活動紹介	31
中高部報告	
高等学部校内大会	32
中学部校内大会	32
キャリアガイダンス・プログラム	33
夏の修養会 釜ヶ崎訪問	33
夏の修養会 長島訪問に参加して	34
夏の修養会 広島訪問	34
リーダーシップトレーニングキャンプ	35
夏山登山	35
夏季訪米語学研修旅行報告	36
中高部 教職員研修会	37
文化祭	38
MLC 訪日旅行団受け入れ報告	38
J 1 秋の遠足	39
J 2 秋の遠足	39
J 3 秋の小旅行	40
S 1 一泊研修(近江八幡)	40
S 2 修学旅行	41
S 3 秋の遠足	41
校内読書感想文コンクールについて	42
中学部キャンパス見学会	43
芸術鑑賞会	44
秋の子ども会	44
卒業生シリーズ	45
課外活動紹介	46
学院日誌	48